

少年期における三島由紀夫のニーチェ体験

高山秀三

要旨

三島由紀夫は少年期からニーチェを愛読し、大きな影響を受けた。ニーチェと三島には、女性ばかりに取り囲まれた環境で幼少期を過ごしたという共通性がある。女性的な環境で育った人間が自身のうちなる女性性と戦うなかで生れたニーチェの哲学は、受動性や従順、あるいは柔弱さなどのいわゆる女性的なものに対する嫌悪を多分に含んでいる。それは思春期の自我の目覚めとともに男性的な方向に向けて自己改造をはじめていた三島の気持に大いにかなうものだった。戦時中、十九歳のときの小説『中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃』は三島自身がニーチェのつよい影響のもとで書いたことを認める作品である。無差別的な大量殺人を行なう「殺人者」の思いを日記体でつづったこの小説にあって、「殺人者」はその「殺人」によって、失われていた生の息吹を取り戻す。この「殺人」は三島が目指す危険な芸術の比喩であると同時に殺人という悪そのものである。ここには幼少期以来、攻撃性の発露を妨げられ、健全な生から疎外されているという意識に苦しみつづけてきた三島の、生を回復するための過激な覚悟が反映している。そしてこの覚悟は、三島と同様に女性に囲まれた幼少期を送り、自分の弱さと世界における局外者性の意識に苦しみながら、男性的なヒロイズムをもって自分を乗り越えていく思想を語りつづけたニーチェの戦闘的な著作への共感から生れている。

キーワード：三島由紀夫、ニーチェ、『中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃』、女性性、ヒロイズム

1. 節穴を覗く子供

三島由紀夫の父、平岡梓は、三島の死の余韻がまださめやらぬ昭和四十六年から四十七年にかけて息子の生涯を回想する談話を雑誌『諸君』に発表した。その連載をまとめた書物『倅・三島由紀夫』のなかには、三島の文学に親しむ者にはひととき印象的な、次のような挿話が語られている。

倅は幼少時代、よく隣家の塀の節穴を覗きに行きました。調べてみますと、同年輩ぐらいの男の子が、さかんに相撲や野球の真似をしたりして楽しんでいるのです。倅は、この自分とまったく別世界で異種の乱暴な遊びが数々行われている不可思議事をなんとか理解しようと熱心に覗き込んでいたのか、それともこれに参加できない身の上を悲しみ、彼らに羨望嫉妬を感じていたのか、いずれにせよ、これを契機に自分の家で僕と相撲をとるようになりました。僕は、長ずるに及んで本物の覗きにさえならなければ結構なことと喜びました。¹⁾

すでに幼少期にあって心のなかにいくつもの地下室を抱えていたような息子の心事を理解するには、平岡梓はあまりにも現実的な農林省の役人だった。三島の理解者であることを誇る文学好きの母親とは違って、三島の父は文学にはあまり縁のない市井の常識人だっただけに、愛息の奇矯な死は理解を絶するものであっただろう。三島由紀夫の死は、この父親にとっては、自分とはあまりにもかけ離れた世界に住む息子をもってしまったことに今更ながら気づかされる悲劇だった。愛息の死後、唐突で不可解なその死を理解しようとして梓は幾重にも思いをめぐらしたのだろう。この挿話はその死の謎を幼年期にまでさかのぼって探ろうとするなかで想起されたわけだが、ここには巧まずして作家三島の原点を鮮やかに浮かび上がらせる象徴的な構図が語られている。息子の死は梓を思いも寄らないほどに、三島という一人の人間に引き寄せたのかもしれない。梓が淡々と語る幼い三島の姿には、その人生を解き明かす鍵ともいえるものが含まれている。三島は梓が危惧した「本物の覗き」にはならなかったようだが、その作品ではよく覗きの場面を描いた。『金閣寺』では南禅寺を訪れた主人公に、出征する兵士の子供を宿した娘がその恋人に母乳を飲ませる場面を窺視させ、『午後の曳航』では主人公の少年に母親とその愛人の交合を窺視させ、遺作となった『豊饒の海』では全巻を通して登場する弁護士本多が老残の身で夜の公園の窺視者に成り果てる次第を描いた。三島は実生活では健全な社会人たろうとするつよい意志をもっていたが、その反面で作品ではみずからのなかに潜むさまざまな悪を野放図に解き放ち、はびこらせた。覗きもまた社会通念から見ればひとつの悪であり、三島はひそかに人間を観察するみずからの宿命的な習性をくりかえし露悪的に描いたのである。

本多は、夜の公園で愛し合う恋人たちのあられもない姿を覗き見て警察に捕まり、年甲斐もない破廉恥漢としてマスコミに書きたてられる。その結果、営々と築いてきた弁護士としての名声を一夜にして失うが、その救いようのない醜態は幼少期以来、認識者として生きてきた三島の自己嫌悪が生み出した戯画的自画像である。三島は書くことが生きることと等しいほどに本質的な作家でありながら、傍観者として人間と社会を観察し、それを素材としてもものを書くということにつよい自己嫌悪を抱きつけた。劣等感や自己嫌悪は少なからぬ人々において創造的な営みの発条となる心理だが、三島ほどにそれが生涯の駆動力となっている例も少ないだろう。三島は窺視になぞらえるほどに、人間社会を局外から観察する認識者としてのおのれを憎み、男性的な肉体とそれが行なう行為に憧れた。三十歳をこえてからの、ボディビルによる肉体改造や剣道などの武術の修行、自衛隊への体験入隊をはじめとする自己改造は、元来は誰よりも文弱だった自分に対するはげしい自己嫌悪が生んだものである。

隣家の庭を覗く三島の背後にあった家は、いくぶん奇矯な性格の祖母が支配する女性的な世界だった²⁾。生後四十日で母親から引き離された三島は、心身ともに病んだ祖母の病室に布団を並べて眠り、危険であるという理由で一切の男の子らしい遊戯を禁じられ、静かに本を読んだり、遊び相手としてあてがわれた女の子たちとままごとをして育った。三島の生家には祖父

もいたし、仕事に追われて不在がちとはいえ農林官僚の父もいたが、彼らの存在感は薄かった。名門の出自を誇る矜持の高さと気性の激しさゆえに一家を支配していた祖母は、兵庫県の農家の出身である夫と偏屈な一人息子を軽視して、病弱ではあるがどこか有望な将来を予感させる初孫にのめりこんだ。溺愛によって自分の選良性を自覚させられ、過保護によって行為の芽を摘まれ、自分をめぐる祖母と実母の陰湿な戦いをはじめとする女性的な心理戦のなかで気をつかいつづけることで、心理の綾を読みとるにはやけに長じた、子供らしくない子供として三島は育った。感受性ばかりが肥大した、女性的で不活発な子供として、三島は塀の穴から隣家の庭を覗き込んでいたのである。塀のこちら側には陰湿で病んだ女性的世界がこの幼児を包み込んでおり、塀の向こうにはいささか乱暴な遊戯に興じる健康な男の子たちの世界があった。塀のこちら側には世界を観察し、認識する例外的で孤独な子供がいて、塀の向こう側には躍動する子供の集団がいた。社会的な動物である人間が将来社会のなかで他人とともに生きていくためには、幼いときから集団、特に同性の子供を含む集団のなかでともに遊びながら育つ必要があるが、幼少期の三島にはそうした経験が徹底して欠けていた。隣家の庭を覗き見ていた幼い三島は、一人の男の子供として、そうした経験が自分に必要なことを本能的に感じていて、単純で男らしい子供たちの集団につよく魅せられていたにちがいない。なぜなら梓の回想にあったように、この出来事のあと、幼い三島は父と家で相撲をとる習慣をもつことになるのである。男らしい行動の世界への幼い憧憬は、三島の生涯を通して持続し、成長し、そのあらゆる活動において表現されることになる。

学習院初等科への入学は、六歳の三島にとって大きな試練だった。男の子らしい遊びを一切知らず、体格は貧弱、言葉つきも立ち居振舞いも女性的な三島は、ほかの男の子たちから徹底してなぶりものにされ、「女」、「青びょうたん」³⁾といったはなはだ不名誉な仇名で呼ばれた。その上、華族の子弟や富豪の子弟が多くを占める学習院では、平民で、経済的にも中流でしかない官僚の子供である三島は、肩身の狭い思いをしていた。家のなかでは祖母という「深情けの恋人」に溺愛され、母や女中たちの関心をも一身に集める王子だった幼い子供は、学校では虚弱さと女性性と低い家柄という負の要素を背負う、劣等感のつよい生徒だった。勉強はある程度できるものの、引け目だらけの三島少年は集団になじむことなく、目立たない生徒として学校の片隅に埋もれていた。

2. ニーチェとの出会い

幼いときから祖母の病室で絵本や児童文学に親しんでいた三島が、はなはだぱっとしない孤独な学童時代から救いとしていたのは文学であり、三島はすでに初等科時代から詩や小説などの創作に励んでいた。中等科で文芸部に所属した三島は天才少年として知られるようになる。その作風は『花ざかりの森』に見られるように、戦時の国家的危機に生命を捧げて奉仕するこ

とを願う多くの軍国少年の血気さかんな精神からは遠い、文弱の極致であり、退廃的とも耽美的ともいえるものだった。国家総動員が叫ばれる時局のなかで耽美的な文学への姿勢をかたくなに守っていた戦時中の自分を振り返って三島は、「二十歳の私は、自分を何とでも夢想することができた。薄命の天才とも。日本の美的伝統の最後の若者とも。デカダン中のデカダン、顔唐期の最後の皇帝とも。それから美の特攻隊とも」(「私の遍歴時代」三二-278)と記している。日本の古典をよく読んでいたが、ワイルドやラディゲをはじめとする西洋文学にも造詣が深く、ワイルドはその反俗的なダンディズムゆえに、ラディゲはその早熟な天才ぶりと夭折ゆえに少年期の三島の偶像だった。三島がニーチェに出会うのは、ちょうどその頃のことである。その出会いの当初、三島はニーチェをワイルドなどの耽美的な既存秩序への反逆者を愛するその延長線上で愛したのである。

三島由紀夫がその一生を通じて、ニーチェを愛読し、傾倒していたことはよく知られている。『倅・三島由紀夫』のなかにも父倅の「倅がニーチェについて持っていた関心は想像以上に強烈なものでした」⁴⁾という証言がある。三島は創作の上でも生き方の上でもニーチェの大きな影響を受けていた。たとえば三島由紀夫の作品の基底にあるニヒリズムとその克服という主題は、なによりもニーチェの思想と大きく関わっている。三島がニーチェに出会ったのは戦時中、いまだ少年のときのことだった。昭和四十一年に手塚富雄が『ツァラトゥストラ』の翻訳を出版したときの記念の対談で三島自身、そのことに触れ、ニーチェを大きな拠りどころとしていた当時を振り返って次のように語っている。

「悲劇の誕生」の、あのエネルギーの過剰からくるニヒリズムということばが実に好きでした。ニヒリズムということばは一種の禁断のことばとして、われわれの世代に共感を与えたと思います。それから超人の思想というよりも、なにか人を無理やりにエキサイトさせる力、ああいうものが戦争中の我々にとっては、麻薬みたいな感じもいくらかあったんです。ぼく個人の体験で申しますと、「ウンツァイトゲメース」というニーチェのことばが非常に好きで、戦争中はウンツァイトゲメース、「反時代的」と訳されていましたが、それがもう唯一のよりどころみたいなものでした。(三九-544)

三島はここで、ニヒリズム、力への意志、反時代性というニーチェ思想の三つの要素に大きな影響を受けたことを語っているが、それらは三島の作家としての特質を説明する重要な要素である。ニーチェは三島の核心に働きかけて大きな共感を惹き起こし、影響を及ぼす哲学者であった。特に、文学を敵視する戦時の風潮のなかで、耽美的な小説をつづっていた三島にとって、反時代的であることを標榜しつづけたニーチェを読むことが大きな支えであったことはまちがいない。

三島はニーチェに魅せられた大きな理由として、「なにか人を無理やりにエキサイトさせる

力、ああいうものが戦争中のわれわれにとっては、麻薬みたいな感じ」だったと語っているが、戦時に限らず、三島が生涯を通してニーチェに惹かれつづけた大きな理由が、その「麻薬みたいな感じ」、つまり陶酔に人を導く「審美主義」的な力であったことはまちがいない。『悲劇の誕生』のなかでは「存在と世界はただ美的現象としてのみ永遠に是認される」(Ⅲ₁-43)と語られているが、端的に「審美主義」の理念をあらわすこの言葉は、哲学者であると同時に洗練された言葉の芸術家であるニーチェのなかに貫してつよく根付いていた生への姿勢を示している。ひとが尋常といえないほどに何かに惹かれるということのなかには、おそらく例外なく三島がいう「麻薬」の作用が働いている。芸術の根底にあるものが世界との融合をめざすディオニュソス的な衝動であるということこそ、ニーチェが『悲劇の誕生』で語ったことである。『悲劇の誕生』は、人間を深い部分で動かすものは、さめた理性よりも陶酔的な没我衝動であることを語っている。ニーチェはこのことをそれ自体が陶酔をもたらす美的な文体で語った。死の一週間前に行なわれた古林尚との対談で、三島は『悲劇の誕生』への特別な愛着を語り、「あんなに楽しくて、心をおののかせてくれる本というのは、ほかにはありませんね。ぼくは無意識のうちにずいぶん影響を受けていると思いますよ」(四〇-769)と語っている。三島だけでなく、一体にひとがニーチェに惹かれるということには、『悲劇の誕生』が端的にそうであるように、ニーチェの書物がいかなる哲学書に比べても、三島がいう、「心をおののかせてくれる」作用を大量にもっていることが大きな理由となっているだろう。

三島がニーチェにおいてもっとも共鳴していたものが、一言で言えば、『悲劇の誕生』で芸術の根源をなすものとして主張されたディオニュソス的なもの、「麻薬」のようなものであったことはまちがいない。それは個別的な生の限界を突破して世界との融合に突き進んでいく一体化の衝動である。特異な幼少期に由来する三島の局外者意識や孤独感は、作家としての名声や、結婚、家族の形成といった世俗的な成功によってもほとんど解消することはなかった。三島の作品が一貫して物語っているのは、三島が一生を通して個別化の苦しみを深甚に苦しみ、そこからの救済をもとめていたということである。すでに塙の節穴から隣家の庭を覗き込んでいた幼い姿のなかに、耐えがたく過剰な個別化を生きた三島の運命が予示されていた。現実の世界で実際の仕事をして働き、いわゆる社会人や職業人としてのキャリアを積み、評価を受けるといようなこと、さらにその上でみずからの家族を生み出すといようなこと、それこそをあたりまえの人生として受け入れて生きていくような人生を送るためには、あまりにも社会や人生への違和をつよく抱きすぎている人間がいる。たとえば芸術や哲学の世界に宿命のように惹きつけられ、それにとりつかれ、没頭せざるを得ない人間であるが、結果として、そのような人間はしばしば社会に背を向け、ときには人生そのものに背を向けることになる。三島由紀夫は外見上、華々しい成功を収め、現実によく対応し、人生の果実をほしきままにしているように見える作家であったが、根本的には人生につよい違和感を抱く人間であり、いかなる社会にも、いかなる集団にも安住することのできない局外者だった。

3. 親近感をもつということ

さて、少年期の三島がニーチェに出会い、熱狂的な読者になったということだが、三島にとってそのニーチェ体験はどのようなものだったのだろうか。ほとんど文学のみを拠りどころにしているといっていほどに文学の世界に生きていた少年三島がニーチェの著作に対して示したような傾倒は、たとえば哲学史におけるニーチェの画期的な意義を評価するなどという学者的なものではもちろんなく、学問的な前提はほとんど抜きでその著作が語りかけてくる一人の人間の声に耳を澄ますというような性格のものであっただろう。それは一つのきわめて孤独な魂が、自分とよく似たところがあるように思えるいま一つの非常に孤独な魂に出会うということだったにちがいない。おそらく三島は哲学史の知識もニーチェの生涯に関する知識もまったく持ち合わせずにニーチェにぶつかり、そこで自分の魂につよく訴え、直観的に人間的な血族と感じられるものに出会ったのである。自分が例外的な存在であるという思いに苦しむ孤独な人間にとって、自分と同じように例外者だったと思える人間が先達として生きていたという事実を知ることにはそれだけで大きな慰めになる。その上、ニーチェがそうであるように、その先達がすぐれた表現者であって、稀有の思考力と感受性と率直さをもって記した作品が遺されている場合、それは後から来た人間にとって困難な生の道標となりうる。ワイルドやラディゲは現実にはあまりぱっとしない少年だった三島にとってその華々しさゆえに憧れる一時的な文学的偶像だったが、ニーチェは現実との齟齬に苦しむ三島を導く生涯の師表になった。

ところで、本格的な芸術や哲学上の仕事は、それに携わる人間の内的必然性によって生み出される全人的な表現行為であって、その人間の気質や性格を大量に含んで達成されている。したがって、ある芸術家の作品やある哲学者の著作が好きであるということは、基本的にはその芸術家や哲学者の気質や性格に対して共感や好感や親近感をもてるということにつながっている。ある人間の作品や著作を好きになるということは、多くの場合、自分に似ていると思えるところがあって、しかもある側面において自分よりもすぐれた、大きな人間をそこに感じるという経験から生じる。もちろん、作品や著作は、さまざまな表現の工夫や洗練化や抽象化によっていわば浄化されたものであって、その作者のなまの人間性そのものではない。作品や著作がどんなに魅力的な、好ましいものであっても、多くの場合にかなりなまなましく強烈な個性をもつその作者は、現実に身近に付き合えば、多分に好ましからざる人間であるということもあるだろう。しかし、それでも、その作者の作品や著作に惹かれることは、少なからずその作者の人間性に惹かれることにつながっている。そして多くの場合、その惹かれることのうちには、気質や感受性や思考の類似性がある。一体に、人間同士の親密な関わりは、互いの人間的な触感に共通性を感じることから始まることが多い。そしてその人間的な触感の近さは、しばしば生い立ちの類似性から生じている。

作品への関心はたいていはそれを生み出した人間への関心につながっていく。特に人間を観

察し探究することが仕事である作家の場合、何かの作品に関心をもちながらその作品を生み出した作者への関心をもたないということはありません。また、創造する人間はすぐれた作品の創造の秘密を知りたいという欲求にもとりつかれる。作者への関心は、したがって創造の背景にあるもの、その作者の肉体的条件や性格、生い立ち、つまり伝記的な事実と及んでいく。三島がニーチェの伝記的なデータにどの程度通じていたかは詳らかでないが、熱烈な愛読者であったからには、関心がなかったということはありません。日本人が書いたものや翻訳されたもので、三島がニーチェに関心を抱き始めた当時、どの程度まで正確な伝記があったかどうかはわからないが、外面的事実を無味乾燥に列挙しただけのものであっても、ニーチェの生い立ちに関するデータを読んだ三島は、確実に自分の生い立ちと類似するものをそこに感じとってニーチェへの親近感をつよめたと推測される。特に女性ばかりのなかで育ったことは、一目で目に付く、自分と共通の境遇であり、ニーチェの著作を解読する一つの鍵となる重要な事実として、三島につよい印象を与えたにちがいない。

三島由紀夫におけるニーチェの影響については、田坂昂のすぐれた三島由紀夫論を嚆矢としてもっぱら思想的な面からいくつもの考察がなされてきた。伝記的なデータにはまったく触れず、もっぱらニーチェの哲学に照らして三島の作品を解読するそれらの考察に比べると、伝記的な両者の類似から同じ主題にとりかかるのはいかにも平俗な方法に見えるかもしれない。しかし、三島がニーチェにのめりこんでいったことのなかに、両者の生い立ちの類似から来る感受性や志向の類似が関わっていることを把握しておくことは、影響関係を理解する上で無駄ではない。以下、青年期に至るまでのニーチェの生い立ちを簡単な素描として示し、それを起点として三島におけるニーチェの影響を考えていくことにする。

4. ニーチェの生い立ち

幼少期のニーチェをとりまく環境もまた、三島と同じく女性的な世界だった。ニーチェは一八四四年、ライプチヒ近郊の小村レッケンにプロテスタントの牧師の息子として生れ、四歳のときに父を失っている⁵⁾。それからナウムブルクに転居した一家は、二十四歳の母フランチェスカ、父方の祖母、父の二人の姉、ニーチェ、その妹、さらに家政婦という構成だった。ニーチェは、六人の女性に囲まれたただ一人の男子だったのである。当時、良家の子弟はギムナジウムに入るまでは私塾に通うか、家庭教師につくのが通例だったが、違う階級の子供たちとも付合える社会性を身につけるべきだという祖母の考え方によってニーチェは六歳で町の小学校に入学する。しかし、厳格な宗教的雰囲気の中で女性ばかりに取り囲まれて上品に育った幼いニーチェが、町の庶民の乱暴な子供たちとなじむことはなかった。男の子同士の遊び方を知らず、その一方で聖書の文句や賛美歌をよく暗唱できる幼いニーチェを町の子供たちは「小さな牧師さん」と呼び、敬して遠ざけた。並の子供とはかけはなれた当時のニーチェの姿

を彷彿とさせる有名な挿話がある。その日は子供たちの下校時に激しいにわか雨が降ってきた。たいていの子供が全速力で駆けて家に帰るなかで、ニーチェはいちばん最後に悠然と歩いて帰宅してきたのである。ずぶぬれになった一人息子を母は叱るが、ニーチェは「学校の規則には、生徒は下校するときは静かに行儀よく帰宅しなければならないと書いてある」と返答する。妹エリーザベトが伝えるこの挿話からは、集団となじまず、学校が与える規則を杓子定規に守って行動する幼いニーチェの孤立した「優等生」ぶりがうかがえる。結局、町の小学校にはどうしても適応できないことが判明し、一年で退校したニーチェは良家の子供たちが集まる私塾に移り、さらに教会付属の学校に通うことになる。その間、つまり六歳から十四歳までの学童時代をニーチェは家庭では女性ばかりのなかの唯一の男子として過ごした。つまり性格形成上、決定的な意味をもつ生後十四年間のほとんどの時間を女性ばかりのなかで暮したのである。

女系家族のなかの唯一の男子だったことを、成人してからのニーチェが自身の成長の上でかなり不幸なことだったと感じていたことはまちがいない。生涯を通して集団や社会になじむことのなかったニーチェの孤独は、女性ばかりに囲まれて育ったその幼少期に少なからず胚胎している。一家のなかでの少年は、単に唯一の男子というだけではなく、稀有な才能の片鱗を垣間見せていたために女性たちの関心と期待を一身に集めていた。その反面で、男の子らしい闊達さを欠いていたニーチェ少年は、元気ががものをいう大きな集団のなかに自分が満足できる居場所を見つけられなかった。家のなかで一身に愛情と期待を集めて肥大していた内向的な少年の自尊心は、家の外ではそれに見合うだけの敬意を見い出せず、その埋め合わせを自分が率領する小集団のなかで主役となることのなかにもとめた。ニーチェが幼少期に取り結んだ少年同士の友情は非常に限定的なもので、恵まれた家庭で過保護に育った自分と同類の少年たちと排他的な少数者の集団を作って、その中心に君臨するというものだった。少年ニーチェは、その卓越した知的能力によって精神的な高みを目指す片隅の小集団の首領になっていた。思春期に至ったニーチェは十四歳で家庭を離れ、名門プフォルタ学院に入学し、六年間を男子ばかりの寮生活のなかで過ごす。良家の子弟が集まる集団生活はひきこもりがちな自分の殻を破って社会性を身につけるチャンスだったが、特定の気の合う少年とばかり付合う非社交的なニーチェの交友のスタイルはそこでも変わらなかった。しかし、ニーチェはこうしたおのれの閉鎖的で柔弱な性格に自身、大いに不満を抱いていた。異様に自己愛がつよく内省的なニーチェ少年は、思春期に入るところから繰り返し回顧録を書くようになっていたが、プフォルタ学院を終えるころに書かれたその種の手記では、自分のそれまでの生活のなかに大人の男性の知的で厳格な指導が大きく欠落していたことを幾度も嘆いている。

プフォルタ学院でのニーチェは、開校以来の秀才として注目されていた。しかし、ニーチェの肥大した自尊心は、それほどの榮譽にも自足することなく、自分に男性的な闊達さが欠けていること、それゆえに大きな集団のなかで一目おかれるような位置にいないことを不幸に感じ

ていた。幼少期以来、夢中になっていた音楽は生涯を通してニーチェに大きな慰めをもたらすものだったが、さらにニーチェが自分への不満を解消する手立てとして夢中になっていたのは「書くこと」だった。すでに思春期の初めから繰り返し、回顧録を書いていたことは、早熟で異様な自己への関心を示しているが、それと並んでニーチェを夢中にさせていたのは、たとえばアレクサンダー大王とフィロタスを主題とする勇壮な劇詩を書くことであり、人間と世界を根底から考察するような哲学論文を書くことだった。古代の英雄を描くことも哲学論文で世界の構造を考察することも、男の子らしい付き合いが十分にできず、集団への不適応を自覚する少年が、いわゆる劣等補償として観念の世界で自分のなかの男性性を十全に実現しようとする営みであった。後年の哲学者ニーチェの著作は、内容においても文体においても男性的な、大胆なスタイルをとることになるが、これもまた、多分に女性的な自身の性格への嫌悪から出たものであるだろう。

同級生との円滑な交友ができないニーチェは学校生活のなかでは一貫して無口な優等生を演じていたが、その仮面の下には規則づくめで厳格な学校を嫌い、自由をもとめるつよい気持があり、快活に振舞いたいという熾烈な欲求が燃えていた。プフォルタ学院を卒業したニーチェはボン大学に入学、自分を見守り、同時に縛り付けていた家族と故郷を離れる。自由な大学生生活のなかで理想の自分に近づく希望を抱きながら、ニーチェは大学でも基本的には従来と変わらぬ非社交的な勉強家の仮面で自分を守り、下宿では勉強と趣味の音楽に明け暮れていた。入学当初は期待をもって学生組合に加入し、一時的にはそこで繰り返し広げられる青春の乱痴気騒ぎに感銘を受けるが、すぐに幻滅し、学生同士の陽気なやりとりにはうまく溶け込むことができなかった。馬鹿騒ぎに加わろうとしないニーチェは「頭のおかしい雌鳥野郎」と呼ばれ、戯れ歌のなかでは音楽好きで、お茶を呑み、菓子ばかり食べている、はなはだ意気のあがらない学生とからかわれていた。柔弱そのものと見なされていたニーチェが、決闘をすると言い出したときは誰もが驚愕した。ことはかねて決闘の可能性を考えてフェンシングを練習していたニーチェがたまたま、一人の好ましい友人と散歩をしていたときに、この人こそ決闘するに値する好敵手であると突然思いついたことに発している。ニーチェの申し出は快諾され、決闘は実行された。ニーチェは鼻に傷を負い、相手もまた額に傷を受けたが、大事には至らず、劣等感に悩む未来の哲学者は自分の勇気を証明できたことに大いに満足した。この一件は、ふだんのニーチェの傍観者的な様子からはかけ離れた印象を周囲に与え、面白おかしく語り草にされた。しかし、外見上、突飛に思われたこの事件は、大学生になったニーチェが、この機会に女性的でもの静かな優等生の仮面をはずし、男らしい豪胆さを周囲に印象づけようという意図を示したできごとであり、ニーチェのなかにうごめく脱皮への欲求をあらわす象徴的なできごとであった。

5. 仮面の哲学者

成人後のニーチェの外貌で最大の特徴となっていたのはその立派な、荘重ともいえる髭である。この口髭のために写真で見るニーチェの印象は、いかにも力への意志や金髪の野獣という勇ましい理念にふさわしい強靱で男性的な哲人風である。しかし、現実にはニーチェに接した同時代の人々がニーチェから受けた印象は、その口髭が与えるものとはかなり隔たっていた。たとえばバーゼル大学で評判の若い秀才教授だった当時のニーチェの講義を受けた学生シェフラーは、後年、その著作の挑戦的な調子とまったくそぐわないニーチェをはじめて見たときの驚きを記している。シェフラーによると、ニーチェの態度はきわめて謙虚で卑下に近いものだった。服装には芸術家風の気どりが感じられたが、それを除くとまったく地味な外見で、疲れ切ったような足どりで歩いていた。教壇で静かに語るニーチェの目は極度の近視でまったく光がないが、声はやわらかで魅力に富み、エクセントリックともいえるその言説をおだやかに包んでいた⁶⁾。

シェフラーの証言のなかには、ほとんど女性的ともいえるほどにものやわらかで穏やかなニーチェがいるが、実際に会った同時代人が書き残したニーチェの印象は、管見の及ぶかぎりでは、いずれも同じようなものである。たとえば、一八八二年に出会い、数ヶ月ではあるがニーチェの生涯に深く関わり、求愛を拒絶したことによってニーチェの心に深い傷を与えた女性、ルー・アンドレアス・ザロメが語るニーチェ像もシェフラーのそれと同じ平面の上にある。ザロメによれば、ニーチェは「低い笑い声とも静かな話し方をする人で、慎重で考え深げな様子で歩くのだが、それはすこし首をすくめるような恰好だった」⁷⁾。また、「日常生活にあっては、彼は非常に礼儀正しく、ほとんど女性的なやさしさと善意の落ち着きを示していた」⁸⁾。ニーチェの髭は実は、このように女性的な印象を与える自分の外貌をカモフラージュする意図をもつものだった。ニーチェ自身、その著作のなかで次のように髭の効用を語っている。

彼の「一面」を知る。——われわれは、初対面の人の眼には、自分で思っているところの自分とはまったく異なるものに見えているということを、すぐに忘れてしまうものである。印象を決定するのは、ほとんどいつも最初に眼に飛びこんでくる特徴である。だからこれ以上ないほど穏やかでやさしい人間であっても、大きな口ひげをたくわえてさえいれば、いわばその背後に身を隠し、落ち着き払っていることができる。——世間一般は、彼を大きな口ひげの付属品と見なす。つまり、軍人のような、怒りっぽい、ひょっとしたら乱暴な人物かと思う。——そこで、それ相応に彼を遇することになる。(V1-249f.)

一般論として書かれてはいるが、これが自分の髭の効用を意識していない人物のものだった

はずはない。三島由紀夫のようにボディビルで筋肉質のからだを作ったり、有名な豪傑笑いをして見せるようなことはなかったが、ニーチェもまた、同じように男らしい外観を作ることに腐心していた。実際、この髭の効用もあって、ニーチェが何も知らない人に与える印象には騎兵将校といった趣があった⁹⁾。過敏な体質をもち、自分の肉体に対するナルシズムもつよかったニーチェは毎日散歩を欠かさず、健康マニアといえるほどに食事にも気をつけていた¹⁰⁾。三島由紀夫は『仮面の告白』によって一躍文壇の寵児となったが、その生涯は自分の意に添う仮面をつくることに莫大なエネルギーを費やすものだった。ニーチェもまた、仮面の哲学者と呼ばれるほどに仮面を必要とする人であり、しばしば仮面について語ったが、もっとも有名なのは『善悪の彼岸』第四十節のアフォリズムだろう。

深いものはすべて仮面を愛する。最深のものは形象や比喩に対して憎しみをもってさえる。対極こそは、その衣裳で神の羞恥が歩き回る、まさに仮装ではないだろうか？…（中略）…わざと粗暴さで包みこみ、目立たないようにやってのけることが、かえってやさしさのあらわれであるようなことがらが存在する。それを見たものがいれば杖をつかんで打ちのめすのが賢明であるような、愛の行為やとてつもない寛容の行為もある。…（中略）…すべての深い精神の回りには、たえず仮面が生成する。彼の一言一言、その一步一步、そしてその生のしるしのひとつひとつが、いつでも誤解を招き、浅薄に解釈されてしまうがゆえに。（VI₂-53f.）

ニーチェの心理分析のほとんどすべてがそうであるように、このすぐれた仮面の分析がニーチェ自身の自己分析から生れたものであることはまちがいない。それゆえ、繊細な心をみずから恥じて粗暴に振舞う男の姿はニーチェ自身がナルシスティックに思い描いていた自己像の延長線上にあるとっていいだろう。ニーチェはその髭に象徴される男性的なものを前面に押し立てることによって、自分の傷つきやすい繊細な内面を隠そうとしたのである。しかし自分で期待していたほどには、その仮面がうまく機能していることはなかったようである。たとえばルー・ザロメは、ニーチェを評して「砂漠や高山からやって来て、世間一般の人間の衣装を着た人間のように、不器用すぎるやりかたで仮面をかぶった孤独な人物」¹¹⁾と評している。ニーチェは豪胆な軍人風を気どるにはあまりにもその本然の心が繊細でありすぎ、人中にいるときは不自然な緊張をたたえた人物だった。威勢のよさや闊達さ、自在さは、著作のなかだけのものであったとっていいだろう。

ニーチェのなかには自分の正体を隠し、何か別のものを演じようとする衝動、つまり仮面の陰に隠れようとする衝動と、すべてをさらけだし、「ありのまま」の自分を認めてもらいたいという告白衝動がせめぎ合っていた。自意識が生み出すこうした二律背反は表現という行為に通有のものだが、ニーチェにあってはその並はずれた自意識のつよさゆえに極端なものになっ

ている。『この人を見よ』といういささかおどけた自伝の標題が端的に示すように、ニーチェはきわめて自意識過剰な人間だった。この自意識のつよさは、集団にとけこむことのない局外者でありつづけたことと多分に関わっている。すでに述べたように、ニーチェの場合、女性ばかりのなかで育ったことが、他とは違うという異類意識を生み、他者の前での自分をつよく意識させていたのである。もちろん、異類意識や疎外感はそれ以外にもさまざまな理由で生まれるものであるし、女性ばかりのなかで育った人間が長じてから局外者意識に苦しむとは限らない。ニーチェの場合も、その局外者意識の要因は生来の過敏で潔癖な資質なども絡まって単一ではないだろう。また、女性ばかりのなかで育った少年であっても、長じて同性から受け入れられる経験をつんでいくうちに、段々と局外者意識から解放されていくことも少なからずあるにちがいない。しかし、それでも女性ばかりのなかで育つことが男の子供に与える影響は、決して小さく見積もることはできない。ほとんどすべての人間の集団において、性の差異は決定的に重要な意味をもっている。就学前に同性と十分に触れることによって、生物学的な性と十分に一致する性のありようを獲得するか否かは、学校生活や社会生活への適応を大きく左右する。ニーチェの局外者性のかなりの部分はやはり、その幼少期があまりにも大量の濃厚な女性性に浸され、それと同化していたことから来ているとっていいだろう。

ニーチェの女性性は成人した後も、それを隠すことが目的の勇壮な口髭が前面に押し立てられているにもかかわらず、その目論見を裏切って表にあらわれずにはいなかった。たとえば、バーゼルでニーチェの講義を受けた学生で、先にその回想を引用したシェフラーは、あるときニーチェの部屋に招待され、勇躍してその部屋に足を踏み入れたが、そこがあたかも「淑女の私室」¹²⁾ のようであることに一驚する。部屋と家具の装飾は花また花で何もかもがかわいらしく、いい匂いがしていたのである。シェフラーは「いとしい女友だちの部屋」¹³⁾ に足を踏み入れたような心持になった。人がそこで暮す住居や部屋のたたずまいは、外貌と同様にその人の気質や性格やその時々々の精神状態を示すものである。花模様だらけの女性的な部屋は、生れてから十四年間、女性ばかりのなかで育ったニーチェにしみついて離れない女性性を端的に示している。実は、ニーチェの部屋におかれた調度品や家具は、大体においてバーゼルに赴任した当初から母や妹が次々に贈ったものだった。さらに、シェフラーが訪れたニーチェの下宿は、バーゼルにおける二度目の住居だったが、その部屋の内部は妹の協力によって整えられていた¹⁴⁾。バーゼル時代のニーチェの下宿には、この病弱な兄の世話をすべく、断続的にナウムブルクから妹エリーザベトがやって来て同居していた¹⁵⁾。花模様だらけの部屋の装飾や家具調度は、おそらくは大部分、この妹の趣味によるものだったであろう。しかし、そうであったとしても、兄を尊敬してやまず、深い愛情をもって献身的に仕えるこの妹が、兄の趣味に反して花柄模様で部屋を満たしたということはほとんど考えられない。人並以上に優雅を愛し、身の回りの状態にこだわりをもつニーチェがこの女性的な趣味の部屋に暮していたということは、それがニーチェの気に入らないものではなかったからである。部屋の様子が示すような女

性的な趣味はニーチェにとって親しみのもてる、くつろげるものであり、とどのつまりニーチェ自身の趣味にかなうものであったと考えていいだろう。これほどまでに女性的な側面をもつニーチェが、女性的であることが極度に侮蔑の材料だったであろう十九世紀のヨーロッパ社会のなかでどんなに生きにくさを抱えていたかは想像に難くない。そして、その生きにくさこそ、ニーチェの巨大な自意識を育んだ土壌だった。

6. 「男」と「女」のあいだ

女性ばかりのなかで育った子どもが、性的役割が重視される外部の社会的環境に入れられたときに、いかに家の内と外のねじれを意識させられるか、いかに自意識をつよめさせられるかについては、『仮面の告白』が克明に描いている。主人公である幼い「私」は祖母によって男の子と遊ぶことを禁じられ、病身の祖母についている女中や看護婦、それから近所の女の子供たちだけで遊んでいた。女性的なものしか知らず、男の子どもらしい遊びなどしたことのない「私」はしかし、よその家に行くと、そこの子どもを相手に心ならずも男の子どもらしい振舞いをせざるを得ない。

ここでは、私は一人の男の子であることを、言わず語らずのうちに要求されてゐた。心に染まぬ演技がはじまつた。人の目に私の演技と映るものが私にとっては本質に還らうといふ要求の表はれであり、人の目に自然な私と映るものこそ私の演技であるといふメカニズムを、このころからおぼろげに私は理解しはじめてゐた。(一—194—195)

幼い〈私〉は自分の性的役割をめぐるねじれたメカニズムをすでに理解しているがゆえに、女の子を相手にやりたくもない戦争ごっこを提唱し、不器用にそれを実行する。(後年の三島が私兵組織である楯の会を主宰し、戦争ごっこを好んだのはこの不器用な戦争ごっこの延長線上にある。一人前の男になるべく営々と自己改造をつづけ、男性的な外観を手に入れた三島は、幼年時代に不器用にしかできなかった戦争ごっこを完全に行なうことができるようになったことをいじらしくも自他に証明しようとしたのである。) さらに、幼少期に獲得しておくべき男性性の基礎というべきものをほとんど獲得することができなかった少年三島は、自我意識が高まる思春期以降に抜本的な自己改造の必要性をつよく意識し、それを実行に移すことになる。中等科に進んだ三島は、運動は苦手だったものの、病弱だったからだは健康になり、戦時の軍事訓練として学習院が富士山麓で行なう徹夜の行軍などでは人並以上の持久力をしめすまでになる¹⁶⁾。成績もあがり、校内では文学の才能によって多少はその存在感を増した三島は、自己評価のたかまりとともに自己改造にとりかかったようである。『仮面の告白』には、中等科の生徒だった「私」が「強くならねばならぬ」という「一つの格率に憑かれだして」(一—

233) 突飛な精神鍛錬法を実践したことが記されている。人と視線を合せることもはばかりの弱い少年だった「私」が、電車のなかで「誰彼の見界なく乗客の顔をじつと睨みつける」(同)のである。睨まれた相手はほとんどがうるさそうに眼をそらし、「私」は次第に視線を合せることに慣れて誰とでも目を合せられるようになった。この挿話そのものはたぶん虚構であるかもしれないが、仮にそうだとでも思春期以降の三島の異常なまでの自己鍛錬へのこだわりを象徴的に示す作り話である。ボディビルを始めるのは三十歳のときのことであるが、三島はそれ以前から一貫して自分の男性性を強化することに腐心していた。

ところで、思春期は自我意識がつよまるだけではなく、性衝動がたかまっていく時期でもある。そして、性衝動のたかまりはそれまで潜在していたさまざまな個人的な問題を一気に顕在化させていく。女性的環境のなかで育ち、男性性の獲得という課題において奥手だった三島の場合、それは同性愛とサド=マゾヒズムという、大きな困難を伴うかたちで発現してきたようである。『仮面の告白』の「私」はこの二つの性衝動を抱えて苦しむ人間として描かれている。小説中の「私」と同様に、三島自身、これらの二つの衝動を深甚に抱えていたことについては、いくらでも証左となるデータがあるが、ここでは立ち入らない。ごく簡略に言えば、同性愛については『仮面の告白』や『禁色』、サド=マゾヒズムについては『憂国』や『午後の曳航』など、三島の作品をいくつか考えてみるだけでも、三島のなかにこれらの性衝動が無視できない程度に存在していたことは明らかである。もちろん、同性愛もサド=マゾヒズムもある程度は誰のなかにでもあるものだが、三島には特に顕著にこの種の性的傾向が見られる。こうした少数派の性衝動がつよく発現してきたことについては、生来の資質ももちろん考えられるが、幼い三島が置かれていた生育環境がそれらの傾向を大いに助長するものだったということもいえるだろう。三島の幼年期の生育環境で何よりも目につくのは、祖母による虜囚生活とも呼べる状況であり、また、女性ばかりに囲まれていたという状況である。前者の状況と後者の状況は元来は同時的に発生したものであって截然と区別することはできないが、強いて区別すれば、前者の状況は攻撃性の禁圧としてサド=マゾヒズムの醸成に直接つながるものであり、後者の女性ばかりのなかで育つ状況は間接的にサド=マゾヒズムを促進するものであったと考えられる。女性ばかりに囲まれた男の子は、女性的な立ち居振舞いと心情を育まれる一方で生活をともにする一団のなかの唯一の男性であることによって過剰に男性であることを意識させられるが、ときにその意識は過剰な攻撃性と残虐性を見せることで自分の男らしさを顕示しようという衝動を生むことにもなるだろう。幼少期の三島はきわめて女性的な子どもであったが、他方では、本論冒頭で紹介した父梓の回想や先に言及した戦争ごっこに認められるようにすでに男性的なものをもとめる意識をもっていた。もちろん、それは父梓がときおり幼い三島と触れ合うことで育まれた部分もあるだろうが、たとえば女中たちによって軽い性的いたづらをされることで男としての意識が育まれることもたぶんあったようである¹⁷⁾。長じてからの三島は多分に意識的な自己変革の成果として、人工的な要素がつよくはあるものの、男性的な特

性を見せていたが、その「自己変革」は完全に自分と反対のものになろうとする努力というよりは、ある程度は生来のものであり、ある程度は幼少期の三島を取り囲んでいた環境が育んだものを全面的に開花させようという努力であったと考えたほうがいだろう。そして、意識的な努力というものが誇張や行き過ぎを伴うことになりがちであるという通例にしたがって、男性性を開花させようという三島の意識的な努力もぎこちなさや過剰さを伴うことになった。三島にあっては、女性のなかで育つことによって女性的な資質が育まれたと同時に、屈折した、隠微なかたちで男性的に攻撃的であろうとするサディズムとその裏返しであるマゾヒズムが生まれ、女性性と男性性はほとんど相いれないかたちで混在していたのである。

『仮面の告白』は、主人公である「私」という一人の青年における同性愛の成り立ちを描く小説である。先に述べたように、小説中の「私」は女性ばかりのなかで育ったために、すでに幼児期において自身の性のありようについて混乱した意識を抱いている。幼い「私」は男性性が欠けた環境のなかで汚穢屋の青年のたくましい太腿に憧れ、中学生になった「私」は年上の男っぽい不良少年に熱烈な思慕の念を抱く。『仮面の告白』は、社会的にきわめて公言しにくい同性愛傾向を描いた小説として、戦後まもない、今よりもはるかに性的なタブーのつよい時代の読書界から大きな驚きをもって迎えられた小説であるが、そこで三島の同性愛に分ちがたく随伴するものとして描かれたサド=マゾヒズムというかたちの攻撃性もまた、同性愛に劣らず、三島文学の重要な要素である。三島におけるサド=マゾヒズムは、『仮面の告白』のあと、『鏡子の家』の舟木収において、現代におけるニヒリズムの病をあらわす症候として入念に描かれ、さらに進んで、『憂国』において他者や世界との究極の融合をもたらすものとして、また、『午後の曳航』においては存在の苦悩からの解放をもたらすものとして描かれることになる。こうした後年の作品や、その自死が示す流血の惨劇へのやみがたい欲望を考えれば、「死と夜と血潮」(一-190)へ向かうサド=マゾヒズムはもしかすると同性愛傾向以上に、三島の作家としての重要な要素をなすものである。『仮面の告白』には、絵本を読んでいた幼い「私」が竜に噛まれた王子の苦痛が描かれていないことに満足できず、王子が苦痛を覚えながら粉々に噛み砕かれてしまう場面を想像して楽しむ叙述に始まり、若い与太者が仲間同士の喧嘩で腹部に刃物を突き立てられ、壮絶な死を遂げる空想に至るいくつかのサド=マゾヒスティックな惨劇の空想が描かれている。なかでもその「倒錯」性によって最も強烈で印象的なのは、思春期の「私」が思い描く「殺人劇場」の空想である。そこでは人種も身分もさまざまな若者がただ「私」の流血の欲望を満足させるために切り刻まれ、食卓に供されるのである。詳細に描かれたこの「殺人劇場」の空想には、おそらく少なからぬ虚構が含まれていて、少年三島が現実ここに描かれたそのままの情景を空想していたということはなかっただろう。しかし、三島のなかには確かに、この種のサディスティックな空想に向かう資質があった。このような空想にふける性癖について、「私」は「生れながらの血の不足が、私に流血を夢見る衝動を植ゑつけたのだつた」(一-242)という詩的な表現で説明している。しかし、これは詩的なレトリック

に過ぎず、三島におけるサド=マゾヒズムの大きな成因は、繰り返すことになるが、生来の資質を別にすれば、一方では女性たちのなかの唯一の男性であることによって「男」であることを過剰に自覚させられながら、他方では乱暴な遊びや振舞いを禁じられ、男らしい攻撃性を発揮することがほとんどできなかった幼年期にあるだろう。乳児期に父母から切り離された三島は祖母のもとで育ち、十四歳になってようやく父母のもとに戻った。三島のなかにあった攻撃性は、幼いときは祖母によってつよく抑えつけられ、その圧力が減じた思春期以降も、すでに形成された非行動的で不活発な性格によって攻撃性の発動が困難になっていた。内攻したその衝動はサディスティックな空想のなかで発露されるほかはなく、その空想は現実の抑止力がないだけに極端に攻撃的で残忍なものになった。他者との交感が困難なことから来る疎外感や異類意識、他者から隔てられているという苦しみ、他者の肉体を破壊し、その血潮を浴び、その肉を食することによって、他者との究極の一体化をとげることへの欲望をつのらせたのである。

『仮面の告白』は、三島由紀夫にとって自分のなかにある秘められた欲望を表現するものとして、ほとんど決死の覚悟で書かれた作品である。初版の『仮面の告白』に付した「ノート」のなかで三島は、この小説を書くことが自身にとってもつ意味を「裏返しの自殺」（一-674）と呼んでいる。小説と銘打たれている以上、そこで書かれている細部の事実性には常に疑問符をつけておかなければならないが、大局において、自身の秘部を人目にさらすことにほとんど等しい「告白」を行なうことで、それまでの生に訣別し、自分の意志による、新たな生を開始する意図がこの小説に含まれていたことはまちがいない。おそらくこの作品で三島が行なったことは、自身の同性愛やサド=マゾヒズムを宿命として描きながら、一転してそれをみずから選びとったものとして、意志的に生きていこうという決意の表明だった。この作品には、そのように見なすことが可能なだけの意志的な自己決定の姿勢が貫かれている。三島がこれほど思い切った作品を書いたことには、戦争の余韻がまだなまなましかった時代の環境が大きく影響している。敗戦による戦前の価値観の崩壊は、あらゆる人間的現象を道徳的に抑圧することの根柢を薄弱にした。そのことを痛感する人間にとっては、同性愛もサド=マゾヒズムも特に罪深いことではなかった。また、戦争はどんな空想も及ばない残酷さを現実の地平で展開し、見せつけていた。戦争末期の三島由紀夫は空襲で死んだ人々の無残な死骸を日常的に見ていたし、戦争に行くことはなかったが、戦場で行なわれていた残虐行為についても多くの情報を得ていただろう。「殺人劇場」を頭のなかで構想する程度のことは、戦争のなかで示される人間性のすさまじい実態に比べれば、なまやさしいものである。三島は戦時中から戦後にかけての荒廃した現実に対応する自身の内部の地獄から出発して、新しい生を構築しようとしていたのである。

ところで戦後の価値崩壊から生れた『仮面の告白』に先立ち、学習院高等科の学生だった三島は戦時中に一つの短編小説のなかでみずからのサド=マゾヒズムを徹底的に表現していた。

学習院高等科の学生のときに書かれたこの小説『夜の車』は、戦争の残酷な現実とそれによる人間性についてのあらゆる楽観的な認識の瓦解を戦時中にいちやく感受した三島の鋭敏さが書かせたものである。『夜の車』は昭和十九年に雑誌『文芸文化』に掲載されたが、戦後、昭和二十三年に短編集『夜の支度』中の一編として収録されるときに『中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃』と改題された。今日、この作品は改題された題のほうで知られているので、この標題の一部をとり、以下、『哲学的日記』と表記して論じていくことにする。

7. 少年三島と「殺人」

先に挙げた手塚富雄との対談のなかで、『哲学的日記』の成り立ちを三島は次のように説明している。

わたくし、「ツアラトゥストラ」の影響をうけて短篇を書いたことがあるんですよ。「中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃」という長い題ですが、それは非常にニーチズムなんです。戦争中に書いたものですけどね。あのころはいちばん「ツアラトゥストラ」やニーチェ全般にかぶれていたころかもしれません。(三九-544~545)

『哲学的日記』は室町時代を舞台とする日記形式の小説であるが、開巻劈頭、その日記の執筆筆者である「殺人者」が第二十五代將軍足利義鳥を殺害する記述で始まる。

□月□日

室町幕府二十五代の將軍足利義鳥を殺害。百合や牡丹をえがいた^{うちかけ}襦袢を着た女たちを大ぜいならべた上に將軍は豪然と横になつて朱塗^{きせる}の煙管で阿片をふかしてゐる。彼は睡さうに南蛮渡来の五色の玻璃のできた大鈴を鳴らす。彼は殺人者を予感しない。將軍は殺人者を却つて將軍ではないかと疑ふ。殺された彼の血が^{しんしや}辰砂のやうに乾いて華麗な^{うんげんべり}纏綯縁をだんだらにする。(一六-145)

室町時代といっても第二十五代將軍の治世という架空の時代であり、しかも主人公である「殺人者」が思うままに快樂殺人を繰り返していきという荒唐無稽な話である。作者は、この人物がどういう外見をしているか、どのような境遇に生きているかなどという小説的な興味にはいっさい顧慮せず、ほとんどの叙述は「殺人」とそれをめぐる「殺人者」の省察に終始している。この作品には、近代以降の小説が一般に現実感をかもしだすべく腐心して作り上げる人物の造型がなく、人物同士の関わりが生むドラマ性もない。難解な雅語を多用してつづられた散文詩風の観念的な作品であり、「殺人者」という孤独な魂の独白であって、その形式において、

やはりさまざまな人物を登場させながら人物造型を欠いた、散文詩風の思想的達成である『ツアラトウストラ』の影響を受けているとみることができる。『ツアラトウストラ』の難解さの一因は、一般の哲学書の難解さとは違って、詩的な隠喩を用いて語られるその表現の含みを注意深く、想像をめぐらして読みとらなければならないところにあるが、このことは『哲学的日記』も同様である。書かれているのは、感情的ないざこざも利害関係もない人々を次々に惨殺していく無差別殺人である。この小説は昭和四十三年に出版された三島の自選短編集『花ざかりの森・憂国』に再録されているが、その自作解説のなかで、三島は白面の文学少年時代に書いたこの小説への偏愛と、その主題の重要性、そして作品を成立させた戦時の精神状態を語っている。

この短い散文詩風の作品にあらわれた殺人哲学、殺人者（芸術家）と航海者（行動家）との対比、などの主題には、後年の私の幾多の長編小説の主題の萌芽が、ことごとく含まれていると云っても過言ではない。しかもそこには、昭和十八年という戦争の只中に生き、傾きかけた大日本帝国の崩壊の予感の中にいた一少年の、暗澹として又きらびやかな精神世界の寓喩がびっしりと書き込まれている。¹⁸⁾

ここで言及されている「航海者」というのは、この小説の登場人物で明に向かう海賊船の海賊頭である。「殺人者」はこの友人との対話で、「花」を去って「海」に向かうことを、つまり「芸術」を捨てて「海賊」になることを勧められるが、その勧めに従わず、「花をうる、海賊よ。そのために物憂げな狂者の姿を伴^{いつは}らう」とつぶやき、「花」を売る、つまり雄々しい行動からは縁遠い芸術の仕事にとどまることへの決意を表明するのである。作者の自註を待つまでもなく、この対話が芸術家と行動家の対立をあらわしていることは明らかである。この対立は後年の三島文学のもっとも重要なモチーフの一つになるが、これについては後に詳しく論じることにして、さしあたりはこの小説の語り手であり主人公である「殺人者」のありように焦点をしばっていくことにする。

「殺人者」は芸術家の隠喩ということであるが、芸術を殺人という犯罪行為になぞらえるところに三島の芸術観、あるいは芸術への姿勢がよくあらわれている。三島のなかでは、芸術作品の創造は突きつめれば殺人と同じような究極の行為、既存の秩序に逆らう悪の行為として考えられていたのである。三島が愛読したトーマス・マンの『トニオ・クレーガー』は、主人公トニオに、芸術を犯罪に通じる反社会的営為として糾弾させ、その例証としてすぐれた小説を書く銀行家で監獄体験のある犯罪者の知人を挙げさせる。また同じ作者の『詐欺師フェリックス・クルルの告白』は芸術家を詐欺師にたとえて描いた小説である。十九歳の少年三島がどれだけマンを読んでいたかどうかは定かではないが、ほぼ同世代の吉行淳之介や北杜夫の例が示すようにマンの文学がすでによく読まれていたことを考えるならば、三島ほどの読書家がマン

をまったく読んでいなかったということは考えにくい。仮に読んでいなかったとしても、少年期からボードレールやワイルドなどの背徳的な文学に親しんでいた三島は、早くから芸術のうちに潜む悪の要素を敏感に感受していたはずである¹⁹⁾。その問題意識は『哲学的日記』において突きつめられ、殺人者を芸術家の隠喩として呈示するに至ったと考えていいだろう。三島のこの過激さは三島自身の芸術家としてのありようの過激さを反映している。マンが芸術家の局外者性や反社会性をいかがわしい銀行家や詐欺師にたとえることにはマンという芸術家のありようが表現されており、三島が殺人者を芸術家にたとえることには三島という芸術家のありようが表現されているのである。富裕な商人の家庭に育ち、おそらくいかがわしい銀行家や詐欺師がそれほど縁遠い存在ではなかったマンにとって、まっとうな市民の道からはずれて芸術家になった自身をそれらにたとえることはごく自然な成り行きであっただろう。これに対して三島がみずからの芸術家としてのありようを殺人者にたとえるのは、おそらく、三島の心象において殺人という行為が非常に近いものであったからにちがいない。比喩はそれを成り立たせている心象の世界では、ほとんど現実そのものといえるほどの重みをもっている。比喩のありようはその表現者のありようを伝えるものである。

『仮面の告白』の「私」がしばしばふけた「殺人劇場」の空想それ自体は小説的潤色ないしは虚構であるかもしれないが、無差別的な快楽殺人を含む嗜虐的な空想に向かう性向が三島のなかにつよくあったことは、三島の作品に少しでもふれた者には容易に理解されるだろう。三島がそうした嗜虐的な空想によって精神の解放を覚え、生きる意欲を得る資質の持主であることは、『哲学的日記』の「殺人者」の感懐に反映している。

殺人といふことが私の成長なのである。殺すことが私の発見なのである。忘れられてあまた生に近づく手だて。私は夢みる、大きな混沌のなかで殺人はどんなに美しいか。(一六-145)

すでに述べたように、三島の生い立ちは男性的な攻撃衝動に適切な表現の方途を見いださせ、いわゆる健全な発散を行なわせる方向への成長には極度に不向きなものだった。誰もが経験的に知っているように、衝動の抑圧はなべて自分が自分の生をたしかに生きているという実感感を乏しくさせ、生から疎外されているという感覚をもたらす。殺人が「忘れられたあまた生に近づく手だて」であるという「殺人者」の感懐は、三島自身の生からの疎隔感が「殺人劇場」のような空想によって一時的に解消される経験から来ていると見ていいだろう。文学表現は三島にとって抑圧されたもろもろの衝動を解放する側面を濃厚にもつ場であった。中等科でも少なからぬ作品を書いていた三島は、すでにそのころからその内なる破壊願望を耽美的に表現していた。たとえば、未曾有の災禍を待望する心理を表現した詩として、十四歳で書いた「^{まが}凶ごと」はよく知られている。「わたくしは夕な夕な／窓に立ち椿事を待った、／凶変のどう悪な

砂塵が／夜の虹のやうに町並の／むかうからおしよせてくるのを。」(三七-400)という一節で始まる「凶ごと」には少年三島の秘められた攻撃性がよくあらわれている。しかし、ここではいまだ現実には非常に奥手の消極的な少年だった三島の攻撃性は、世界の崩壊のような椿事を待つという受動的なかたちでしか表現されていない。『哲学的日記』は「凶ごと」のあと、学習院高等科時代に書かれているが、内なる攻撃性をこれほど過激で積極的な嗜虐衝動として表現することは三島のそれまでの創作において画期的なことだった。

「殺人者」は生きているという実感が欠如している状態からサディズムによってはじめて解放され、「成長」し、「発見」するのだが、三島にとっても悪の匂いがたちこめるサディズムを表現することによって抑圧されていた生がよみがえる実感はあったにちがいない。しかし、サド＝マゾヒズムを含むいわゆる「倒錯」的な性は、秩序が保たれた社会にあっては、社会的な祝福や認知を欠いたものであるがゆえに、充足されることがあってもたいていは一時的である。そうした性は、それだけにはげしくなりがちであり、次第に刺戟を強化してさらなる充足感をもとめることにもなる。三島が空想する「殺人者」の殺人もそれゆえに無差別化し、大量殺人化していく。

乞食^{こつじき}百二十六人を殺害。この下賤な芥どもはばくばくとうまさうに死を喰つて了ふ。殺人者の意志はこの上もなく健康である。(一六-146)

繰り返すことになるが、三島はこの大量快楽殺人者を主人公とする小説を『ツアラトゥストラ』の影響下に書いたものであると語っていた。これについては、散文詩風の観念的な叙述という類似点をすでに指摘したが、「非常にニーチズム」と語っていることからわかるように、その影響は形式面だけのことではなく、思想的な面に及んでいる。ニーチェといえはニヒリズムとその克服という主題がすぐに想起されるが、「殺人」が「忘れられてるた生」を回復する「手立て」であることを語る『哲学的日記』が、そうした問題意識を濃厚に含んでいることは明らかである。「殺人者」の設定には、三島個人が攻撃性の抑圧によって生の充足感を得ることができず、空虚感にさいなまれ、そのニヒリズムの状態からの脱出を過激なまでもとめていたことが反映している。しかし、抑圧され、出口を見いだすことができないサディズムに苦しんでいたとしても、市民的な観点からすれば悪でしかないサディズムをこの小説のようなかたちで端的に表現することは世俗道徳との齟齬を考えれば容易にできることではない。それを可能にするためには、周囲に文学をよく理解する人々がいて、このような反俗的な作品を発表することを後押しする環境が必要だが、すでに天才ともてはやされていた三島にはそうした環境があった。同時に、ワイルドをはじめとするさまざまな読書体験を通じて文学に表現された悪への免疫ができていたことも、これほど過激な反俗性を可能にした理由であるだろう。しかし、その心中に巢食う悪の衝動を表現するにあたって、少年三島を最も強力に後押ししたのは、本

人がその影響を語る『ツアラトウストラ』をはじめとするニーチェの書物だったと考えられる。

8. 悪の哲学

周知のようにニーチェの哲学はキリスト教との対決を根幹として成立しているが、その戦いの由来はこの哲学者の生い立ちと大きく関わっている。両親が代々続く牧師の家系だったニーチェは、牧師だった父の早すぎる死の後にも厳格なキリスト教道徳が支配する環境のなかで育った。キリスト教道徳に対する全面的な論争の書である『道徳の系譜学』でニーチェは、「じつのところ、わたしは十三歳の少年の頃から、悪の起源という問題に付きまわっていた」(VI₂-261)と書いている。少年ニーチェがこの問題について独自に与えた解答は、「神に栄誉を与えて、神を悪の父とする」(aa.O.)という皮肉のこもったものだった。謹厳な家庭のなかで道徳の抑圧に苦しんでいた少年にとって、悪とは何かという問題は精神の死活にかかわる重大事だった。哲学者となったニーチェが数十年を経てこの問いに与えた最終的な回答は、キリスト教道徳とは、生に対するルサンチマンにとりつかれた弱者たちの集団であるキリスト教会が強者を支配する道具として捏造したものであり、教会はみずからの支配に都合のいい善悪の観念を信徒におしつけているという理解だった。この理解には、寡婦であったり未婚であったりすることで社会的弱者であり、そのことにルサンチマンを抱く女性たちによって厳しい道徳的な支配を受けた幼少期に胚胎するニーチェ自身のルサンチマンを見ることができるだろう。ニーチェの考え方には、社会的弱者である家族の女性たちと、彼女らによって生のダイナミズムから遠ざけられ、弱々しく育った自分への憎しみが反映している。ニーチェの哲学に顕著な弱者への嫌悪は、たぶん、みずからが育った女性的環境への嫌悪と、そこで生まれたおのれの無力性への嫌悪から生れている。

キリスト教道徳を弱者による奴隷一揆の所産とみなす『道徳の系譜学』は、『ツアラトウストラ』が完成してまもなく書かれたものである。ニーチェの著作のなかで三島が戦時中に読んだものとして挙げているのは、『悲劇の誕生』と『ツアラトウストラ』であって、『道徳の系譜学』については不明なので、『ツアラトウストラ』のなかで道徳に関わる部分を『哲学的日記』との関わりで検討していこう。ニーチェの代弁者である作中人物ツアラトウストラは善と悪に絶対的な基準がないことを繰り返し説いていく。たとえば「すべての事物はあの永遠の泉のほとり、善悪の彼岸において洗礼を受けている。善と悪はそれ自体においては、ただ中間的陰翳であり、じめじめした厄介事であり、移りゆく雲にすぎない」(VI₁-205, 「日の出の前に」)と説く²⁰⁾。すなわち、すべての事物が永遠の相においては祝福されているものであり、人為の産物である道徳という根本的にあやふやなものを超えたところにあると語っている。さらに、ツアラトウストラは肉欲、支配欲、我欲という三つの最大の悪とされるものを俎上にのせ、「それが人間的によいものであることを量って示そう」(VI₁-232 「三つの悪について」)と語る。

それぞれの欲望についてツァラトゥストラはいくつもの肯定的な言葉を述べるが、たとえば肉欲については、「性欲。枯れて萎んだ者にとっては甘い毒でしかない。しかし、獅子の意志をもつ者にとっては偉大な強心剤、敬意をもって蓄えられたぶどう酒のなかのぶどう酒」(VI₁-233)と語り、それが生命力の乏しい弱者にとっては毒でしかないが、つよい意志をもつ強者にとってはさらに生命を燃え上がらせるものであると説く。また我欲については、「力強い魂から湧き出る健全な我欲」を「至福のもの」(VI₁-234)と讃える。力強い魂はつよく美しい肉体を兼ね備え、卑怯な者、臆病な者、卑下する者、忍従的な者、奴隷的な者を侮蔑する。ニーチェはここでキリスト教的な善 (gut) と悪 (böse) の価値基準に代えて、優良 (gut) = 強者と粗悪 (schlecht) = 弱者という価値基準を打ち出し、後者こそを健全な価値基準としている。

キリスト教とはあまり縁がなかった三島が、キリスト教道徳に対するニーチェの憎悪にみちた批判をどれだけ身に染みて理解したかはわからない。しかし、少なくともおのれのなかにあるサド=マゾヒズムを悪として捉える視点を三島がもっていたことは当然のことと考えられる。本来、共同存在として生きることを宿命としている人間は、サド=マゾヒズムまではいなくとも、ただ単に人と違っていたり孤独であるというだけで罪悪感を抱くように出来ている。三島ほどに自身の局外者性をつよく感じていた人がその性的な異類性に罪悪感を抱かなかったはずはない。三島の生涯を貫く美と超越性への欲求は、その異類性にまつわる苦しみから生れている。ニーチェもまた異類性に苦しんだ人であり、その苦しみが生み出した思想はキリスト教という問題を抜きにしても三島の心に響いたのである。しばしば暴力的なまでに過激な表現は、ニーチェと三島の共通項である。もちろん、小説家でないニーチェの表現は三島のように流血の事態にあふれているわけではないが、「弱者」や「群畜」に対するその執拗で苛烈な罵倒に見られるように、思想の表現としてはしばしば最大限にサディスティックな言葉が発せられる。『善悪の彼岸』で「哲学は常に世界をみずからのイメージにしたがって創造するし、それ以外の方法は不可能である」、「哲学とはこのような暴虐な衝動そのものである」(『善悪の彼岸』9節, VI₂-16)と語るとき、ニーチェはみずからの哲学という営為のなかにあるサディズムをあげすげに告白している。ニーチェはまた、「人間性ゆたかな近代を誇る」人々が黙して語らない「真理を漏らすということをあえてやってのけよう」(『善悪の彼岸』229節, VI₂-171)と前置きしてこう語る。

われわれが「高次の文化」と呼ぶほとんどすべてのものは、残酷さの精神化と深化の上に成り立っている——これが私のテーゼである。あの「野獣」が殺害されたということはまったくくない。まだ、生きているし、その盛りにある、それどころかひたすら——神聖なものになっている。(VI₂-172)

人道主義や民主主義、平等主義、平和主義などの近代を主導する思潮に対してニーチェはそ

の「欺瞞」性をサディスティックに暴露し、飽くことのない執念をもって無慈悲な「真理」を人々に投げつけた。戦後の日本における民主主義や平和主義の「欺瞞」を嫌った三島の反時代的な言葉は、ニーチェの考え方から多くを引き継いでいると見ていい。『ツアラトウストラ』では殺人の快楽が「本来の自分になる意志」(VI₁-43)の実現であるような人間のありかたが善悪の判断を超えて理解されるべきであることが語られ(「蒼ざめた犯罪者について」)、「戦争と勇気は、隣人愛よりも多くの偉大な業績をあげてきた」(VI₁-55)と主張される(「戦争と戦士について」)。ニーチェのこうした言葉はもちろん、一般に「善い」ものと見なされる思想が隠蔽している「真実」を暴くものとして傾聴されるべきであるが、心理面からいえば、抑圧され、他者に向かって放出される術を知らない攻撃性が、同時代の思潮に振り向けられ、結晶したものである。もちろん、しばしば言われるとおり、ニーチェの表現は韜晦やイロニーを大量に含んだ複雑なものであって、その表現の過激さはいつでも多分に「戦略」的である。

われわれの最高の洞察は、その洞察を受けとる資質もなく、資格もない者たちの耳に間違って入ったときには、まるでばかげたことのように、ことよると犯罪のように聞こえなければならないし——そんなふうに仕向けられるべきである！(『善悪の彼岸』30節, VI₂-44)

ニーチェがここで最高の洞察と語っているのは、何よりも自身の著作にあふれている洞察のことである。自分のような高度の洞察をもつ人間が発する言葉の重層性を理解しない人間によって自分の著作が読まれてはならないことを、ニーチェは先手を打って語っているのである。もちろん本の著者が読者を選ぶことなどはできないので、一般的な理想としては、著者は読者が誤解しないように十分に用心して書くべきであるが、現実には、表現力に富んだ、芸術家気質のつよい人々ほどイロニーや逆説などの、一筋縄ではいかない、入り組んだ修辞を凝らし、あえて誤解を招くような、きわどい表現に向かうことが多い。「仮面」と「素面」が見分けがたい、韜晦に満ちた表現のありようもまた、三島がニーチェに共感を抱いた大きな理由であり、またそこから多くを学んだものであるだろう。生涯最後の表現だった自死がさまざまな理解と誤解を生んでいることが端的に示すように、三島由紀夫もまた一筋縄ではいかない表現者であり、その「真意」を読みとることのむずかしい作家である。『哲学的日記』は三島の全作品を見渡しても特に難解なものの一つであるだろうが、その難解さは単にむずかしい表現をひけらかす少年の虚栄を示すだけでなく、理解されがたく、表現しがたい、いわば虚実の皮膜に存在するものを表現することのむずかしさから来ているといっていいたいだろう。

9. 個体化の原理からの脱出

人間は自立した個人でありたいという欲求をもつ一方で、個体であることに苦しむ存在である。一つの肉体のなかに封じこめられ、さまざまな危険にさらされてあるということに人間は不安を覚え、他と結びつくことに安心をもとめる。ニーチェの哲学の公的な起点となった『悲劇の誕生』は、個体化の苦しみをモチーフとして生れた著作である。ニーチェは個体であることの苦しみから人間を解放するものとして、古代ギリシャの酒神であるディオニュソスを理解した。ディオニュソス的な陶酔、すなわち音楽が鳴り響き、人々が狂ったように踊る集団的な陶酔にとらえられた人間は歓喜のなかで「より高次の共同性」(Ⅲ₁-26)に溶けこみ、その一体感のなかで個体であることの苦しみから解放される。「個人というかたちを破棄し、個人を神秘的な一体感によって救済」(Ⅲ₁-26)するディオニュソス神こそ、芸術衝動を根底でつかさどる神であるとニーチェは考えた。ディオニュソス的な一体化の陶酔こそ芸術衝動の根源であり、芸術こそは「生を可能にし、生きる価値のあるもの」(Ⅲ₁-23f.)にするとニーチェは考えたのである。こうした考察に至ったニーチェはこの世の異邦人として誰よりも個体化の苦しみを苦しんだ人であり、芸術に救いをもとめた人だった。

三島由紀夫もまた、繰り返し述べてきたように際立った異邦人意識をもっていた。他から隔絶した個体であるということに苦しみ、個体であることからの解放をもとめつづけた人だった。三島はつねに、死に魅せられた作家として論じられるが、三島のそうした資質は個性性の苦しみを打ち破るものとして死を考えるとところから来ている。三島にとって芸術の魅惑は、死の魅惑に等しいものだった。三島は芸術のなかで代替としての死を死につづけていたのである。三島が自作の解説で語ったように、『哲学的日記』の「殺人者」が行なう殺人は芸術の比喩である。ディオニュソス的な陶酔のなかでは、自他の別がなくなるがゆえにみずからの死と他を殺すことは同一である。「殺人者」に殺される者たちは、自他融合の歓喜のうちに死んでいく。

北の方^{れいこ}瓏子を殺害。はつと身を退く時の美しさが私を惹きつけた。蓋し、死より大いなる羞恥はないから。

彼女はむしろ殺されることを喜んでゐるもの、やうだ。その目にはおひおひ、つきつめた安らぎの涙が光りはじめる。私の凶器のさきの方で一つの重いもの——一つの重い金と銀と錦の雪崩れるのが感じられる。そしてその矢はれゆく魂を、ふしぎにも殺人者の刃はけんめいに支へてゐるやうである。この上もない無情な美しさがかうした支へ方にはある。(十六-146)

「殺人者」と北の方は一体となり、「この上もない無情な美しさ」を示す「殺人」という芸術

を作りだす。大量に殺される乞食たちは「ばくばくとうまさうに死を喰ってしまふ」。能若衆花若もまた、刃で貫かれ、「玉虫色の虹をぬがきつつ花やかに」（一六-147）血をほとばしらせながら、「殺人者」との「つかのまの黙契」（同）を信じて死んでゆく。「殺人者」と殺される者は一体であるがゆえに、「恒に彼は殺しつゝ、生き又不斷に死にゆく」（同）と書かれる。「殺人者」の行為は相手を貫く「殺人」であると同時にみずからを貫く「自死」でもある。攻撃性を表出する手立てをかつて知らなかった少年三島の心象世界は、攻撃性を抑制する手立てを知らず、それを向ける相手も選ばない。他を殺害しようが、おのれを殺害しようが、個体を破壊し、血しぶきのなかで世界との融合をなしとげるといふ点では変わらない。すでに作品冒頭の將軍殺害のあとに「殺されることによつてしか殺人者は完成されぬ」（一六-145）と記され、「殺人者」が最終的に到達すべきものが自身の死であることが示されている。ニーチェは『善悪の彼岸』中のアフォリズム（76）で「平和な状態にあるとき、好戦的な人間は自分に襲いかかる」（VI₂-87）と書いているが、これは加虐と自虐、ひいては殺人と自死の同一性を語る言葉である。サディズムとマゾヒズムは少なくとも三島やニーチェにあつては、ベクトルを異にするだけで、もともとは同一の衝動であると理解されている。

しかし、『哲学的日記』を書いた三島がその時点で現実に自死を考えていたと思うのは短絡的であるだろう。そもそも個体化の苦しみからの究極の解放としての死にどんなに憧憬を抱いていたとしても、人は可能な限りは生のなかに他との融合をもとめ、その幸福がいくばくか実感される限り、あるいはその期待がもてる限りは生にとどまるものである。人生の入り口にあるといつていい少年三島に、死によってではない自他融合の至福の瞬間が現実に訪れることへのういういしい期待がなかったはずはない。実際、三島のその後の人生は、生のあらゆる果実を得ようとする貪欲さと尋常ならざる努力によって彩られているが、それは究極においては局外者の状態を脱し、世界と融和しようとする欲求の所産である。『哲学的日記』を浸している死の観念は、生をもとめる希望と一体である。三島の矯激さは『哲学的日記』において、再生への希望を「殺人」という過激な表現に託している。「殺人」は抑圧された攻撃性の表現であると同時に、芸術家としてためらうことなく表現において禁を犯すことへの覚悟を示すものである。あらゆる事物を覆う日常のとばりを切り裂くとき、そこに「忘れられてゐた生」が姿をあらわすことが期待されている。「殺人者」は「死」を見ることで、「生」の実相に至ろうとする。しかし、もとめる「生」はどこまでもとらえがたく、到達しがたい。遊女紫野を殺す「殺人者」は、「彼女を殺すには先ずその夥しい衣裳を殺さねばならぬ」（一六-150）という。「衣裳」という仮象はしかし、幾重にも重ねられていて、それがすべて貫かれ、「実相」に刃が届く前に、「その奥で彼女は到達される前にはや死んでゐる」。「殺人者」の「殺人」によって「生」に到達しようとする試み、禁を犯すことにおいて「生」の実相に到達しようとする試みは、無限に重なる衣裳、すなわち限りなく連なる仮象を切り裂きながら、結局は「実相」に至らない。「私の刃はますます深く彼女の死へわけ入つた。そのとき刃は新しい意味をもつた。内部へ入ら

ずに、内部へ出たのだ。仮象の奥にあるものはこれもまた仮象でしかない。「忘れられてゐた生」への道は遠い。「殺人」によって「生」に至ろうとする「殺人者」の歩みは終わることがないだろう。「殺人者」は無数の「殺人」を犯しながら、「忘れられてゐた生」を恒久的にわがものにするのではない。作品の冒頭において、「殺されることによつてしか殺人者は完成されぬ」という自覚が語られていたのは、このことを予感していたからである。「殺人」という我執のきわみを生きる「殺人者」は、「自死」という没我のきわみにおもむくことになるだろう。「殺人者」は「陥没から私の投身が始まるのだ」と語る。「陥没」は夢想からの脱落であり、「投身」は自分を犠牲にすることを意味するだろう。自己犠牲はまた、それによって自分と世界が再生する希望をはらみつたなされる行為である。

『哲学的日記』は死を語りながら、再生への希望を語り、しかもその実現の限りない困難を示している。しかし、『ツァラトゥストラ』にインスパイアされたというこの作品は、題材と外観の陰鬱と退廃に反して、少年三島のなかに息づく強力な生命力を垣間見せているのではないだろうか。『ツァラトゥストラ』はニーチェの生涯に照応する伝記的な側面をもつ著作であるといわれる。たとえばそこに登場する魔術師がヴァーグナーをモデルとしているといわれるなど登場人物のなかに現実にニーチェが出会った人物の面影を見いだすことができるだけでなく、何よりもツァラトゥストラの「超人」へのつよ意志で貫かれた遍歴のなかに、あくことなく自分を乗り越えてゆこうとする意志で貫かれたニーチェ自身の生涯の反映を見ることがができる。周知のように、『ツァラトゥストラ』は、高山の洞窟で孤独な瞑想に耽っていたツァラトゥストラが下山し、町に入って市場の群集にみずからの考えを語りかけることで始まる。そこでツァラトゥストラは超人の観念について、「人間とは超えられるべき何かである」(VI₁-8)、あるいは「人間は動物と超人のあいだを結ぶ一本の綱である」(VI₁-10)と語る。『ツァラトゥストラ』一篇は、たえずみずからを超えゆく超人の観念を導きとする主人公ツァラトゥストラの一面で教養小説にも似た道程を叙述している。もちろん、ニーチェ自身が、「ここでは一瞬ごとに人間が克服されている」(『この人を見よ』VI₃-342)と解説するこの書物は、根本的に人間精神の持続的な発展を弁証法的な歩みとして描く教養小説に対するアンチテーゼというべき側面をもっている。しかし、この世に生きることの「意義」をもとめる精神的遍歴を描くという点で、『ツァラトゥストラ』には教養小説的な一面がある。「大地の意義」と呼ばれる超人への歩みをツァラトゥストラはこう語る。

人間は…(中略)…深淵の上に張り渡された綱である。

渡って向こうへ行くのも危険だし、綱の上にいるのも危険、振り返るのも危険だし、戦慄して立ちすくむのも危険である。

人間において偉大なこと、それは彼が一本の橋であって、目的ではないことだ。人間において愛しうること、それは彼が過程であり、没落であるということだ。

わたしは愛する、没落する者として生きるのだから、生きるすべを知らない人間たちを。それは乗り越えてゆく者だからである。

… (中略) …

わたしは愛する、没落し、身を投げ出す理由をはるかな星々のかなたにもとめず、大地がいつか超人のものとなるように、大地のために身を捧げる者を。(VI₁-10f.)

『哲学的日記』の殺人者は「陥没から私の投身が始まるのだ」と語るが、おそらくこの「陥没」と「投身」はツァラトゥストラが語る「没落」と「大地に身を捧げる」に照応している。ツァラトゥストラは高山での孤独な隠棲に訣別して、人間世界に戻り、「没落」へと踏み出す。ツァラトゥストラを下山させたのは、「星々のかなた」、すなわち来世や彼岸といった宗教的なイメージを含むロマンティックな夢にすがって生きることをやめ、「大地に身を捧げる」、つまり現世のために身を投げだすことをみずから実践し、地上に生きる人間たちにも説くためだった。ツァラトゥストラは市場の群集に向かって、「兄弟たちよ、大地に忠実であれ」と「懇願」(VI₁-9)するのである。少年三島がニーチェから受けとったものなかには、ニーチェのこの現世に身を投げだすことへの促しが含まれていたにちがいない。少年三島が『ツァラトゥストラ』における「没落」と「身を捧げる」という観念を、地上に身を投げだす意志に結びつけて理解していたことは、たとえば、『哲学的日記』のなかの次のようなくだりからも推測できる。

一つの薔薇が花咲くことは輪廻の大きな慰めである。これのみによつて殺人者は耐へる。彼は未知へと飛ばぬ。彼の胸のところで、いつも何かが、その跳躍をさまたげる。その跳躍を支へてゐる。やさしくまた無情に。恰かも花のさかりにも澄み切つた青さをすてないあの萼のやうに。それは支へてゐる。花々が胡蝶のやうに飛び立たぬために。(一六-153)

「薔薇」や「花」の開化はもちろん、芸術の達成を意味している。それは「輪廻」の苦しみのなかにおかれた人間の「慰め」であり、それあるがゆえに生きることは是認されうる。しかし、その開化は生からの逃避のためのものではなく、あくまでも地上の生のためのものでなければならない。「殺人者」は「未知へと飛ぶ」ことなく、あくまでも地上にとどまり、「花々が胡蝶のやうに飛び立たず、地上で開花することを願うのである。『哲学的日記』に語られているのは、「存在と世界はただ美的現象としてのみ永遠に是認されうる」という審美主義を基本としながらも、地上にとどまり、地上の人々のために語るツァラトゥストラ、ひいてはニーチェの姿勢に影響を受けた少年三島の思いである。「殺人者」の「殺人」は「花が久遠に花であるための」(一六-148)ものであると語られる。「殺人」も「陥没」も「投身」もすべては永遠の芸術を生み出すための破壊であり、死である。『哲学的日記』は破壊と死を通した大きな創造の夢を語っているのである。殺人者は語る。

私は夢見る、大きな混沌のなかで殺人はどんなに美しいか。殺人者は造物主の裏。その偉大は共通、その歓喜と憂鬱は共通である。(一六-145~146)

破壊は創造の裏面であって、「殺人者」は造物主と同じように世界の生成をもくろむものである。少年三島が「殺人者」に託して語る省察の気宇壮大とも傲岸ともいえる精神の姿勢は、三島本人にもともと備わったものであるとともに、人間の超克と生の肯定を説く『ツァラトゥストラ』に鼓舞された結果でもあるだろう。ニーチェは『この人を見よ』のなかで、ツァラトゥストラという人間のタイプについて、「これまで人々が然りと言ってきたすべてのものに前代未聞のしつこさで否を言いつけた人間が、それにもかかわらず、いかにして否を言う精神の反対物になりうるかということ」(『この人を見よ』VI₃-343)がその心理的問題であると語る。あらゆるものに対して敢然と否定を繰り返しながら、究極においてすべてを肯定する精神のありよう、それは究極の「雄々しさ」といえる精神の様態であるだろう。『ツァラトゥストラ』に限らず、ニーチェの著作はすべて、この「男性的」な精神のありようを貫こうとする苛烈なまでの美意識を重要な駆動力としている。存在と世界は美的現象としてののみは認められるという『悲劇の誕生』の審美主義は、現世と生の肯定を説く後期の著作においても一貫してニーチェの哲学の根幹をなすものだった。もちろん、生来の敏感で虚弱な体質からしても、女性ばかりに囲まれていたその生い立ちからしても、男性的であろうとすること自体が多大な自己克服であったニーチェにあって、そのヒロイックな美意識にもとづく哲学が自身の精神にどれほど多くの無理を強いるものであったかは容易に想像がつく。そのキリスト教批判にもかかわらず、ニーチェのファナティックな自己鞭撻は、実は牧師の息子であるニーチェのなかに根強くあったキリスト教倫理を源泉にしていた。これほどまでに自分自身を超え、あらゆる苦難を肯定することを生の課題とした、あるいは課題にせざるを得なかったニーチェの人生は、耐えがたい病苦と孤独と無名性におおわれた苛酷なものだった。ニーチェの生涯は、女性的に彩られたキリスト教道徳が生んだ金縛りの状態から自身を解放しようとする意志によって貫かれていた。その意志はそのまま到達不可能な強者の理想を自身に課すことにつながり、その自縄自縛は「狂気」にまで充進していくものだった。そしてそれは、同様に女性的な世界の呪縛から脱して男性的な強者を目指す意志に強迫的にとらえられ、空想のなかにしか存在しないような「男」のイメージを追求した果てに奇矯な死を遂げた三島自身の生涯の軌跡と相似形をなすものだった。

10. 殺人者と航海者

すでに言及したように、『哲学的日記』の「殺人者」は海賊頭との対話において海賊になることを勧められるが、それを斥け、芸術家であることを選ぶ。しかし、海賊頭の勧めは「殺人

者」の心をつよくとらえ、動揺させるものだった。

海賊は飛ぶのだ。海賊は翼をもつてゐる。俺たちには限界がない。…（中略）…

殺人者よ。花のやうに全けきものに窒息するな。海こそは、そして海だけが、海賊たちを無他にする。君の前にあるつまらぬ^{しきみ}閼、その船べりを超えてしまへ。強いことはよいものだ。…（中略）…

海であれ、殺人者よ。海は限界なき有限だ。玲瓏たる青海波に宇宙が影を落すとき、その影は既にあつたのだ。…（中略）…

「何を考へてゐるのか、殺人者よ。君は海賊にならなくてはならぬ。否、君は海賊であつたのだ。今こそ君はそこへ帰る。それとも帰れぬと君はいふのか」

殺人者は黙つた。とめどもなく涙がはふり落ちた。（一六-151～152）

海が三島文学においてもつ重要性については、たとえば『岬にての物語』や『真夏の死』、『潮騒』、『午後の曳航』、そして生涯の集大成として書かれた『豊饒の海』などの、三島文学でも特に重要ないくつかの作品の題名を挙げてみるだけでも首肯されるだろう。海はあらゆる生命の母胎であり、同時にあらゆるものを呑みこんで不変の場所である。海はその果てしない大きさと荒々しさによって冒険心を喚起し、その美しさとやさしさによってそこに回帰したいという郷愁を喚起する場所である。他方で、三島文学における海に生きる者たちの性格はどうかというと、『潮騒』や『午後の曳航』の主人公たちが範例的に示すように、行動や冒険を好む男性的な果断さを備えている。『潮騒』の漁師新治は青年の純情と男性的な勇気の権化であり、『午後の曳航』に登場する航海士塚崎竜二は、その恋人の息子である十三歳の登の眼には遠い海の輝きと栄光に包まれた英雄に映る。竜二が独白するところでは、海は竜二自身にとって、「あの大洋の感情、あの常ならぬ動揺がお前の心に絶えず与へてゐた暗い酔い心地」が住まうところであり、「彼が男であり、世界から隔絶して、ますます男であることを推し進めるやうな状況を」形成する場所である。陸に戻り、登の母と結婚することになった竜二は『俺は永遠に遠ざかりゆく者でもありえたのだ』と独白しながら、かつて青年時代に抱いていた海への思いを回想する。

あの海の潮の暗い情念、沖から寄せる^{つなみ}海嘯の叫び声、高まつて高まつて砕ける波の挫折……暗い沖からいつも彼を呼んでゐた未知の栄光は、死と、又、女とまざり合つて、彼の運命を別誂えのものに仕立ててゐた筈だつた。（九-383）

竜二にとって、海は死であり女であり、それらをめがけて突き進む男の栄光が実現される場所だった。海は、男のなかの男がそのなかで至福の死を遂げるべき究極の大いなる女性だった

のである。『哲学的日記』においても、竜二の想念そのままに、海賊頭は海に生きる者としてその優位性を誇り、「殺人者」を海的生活へと誘う。そして「殺人者」は抗しがたい魅惑を感じながら、海に対するみずからの適性のなさを自覚するがゆえに沈黙し、涙を流す。「殺人者」が海につよく惹かれながら、海を断念するのは「強いもの」ではないという自覚ゆえであるだろう。海賊頭がみずから強者であることを自認していることが示すように、海賊であること、すなわち「行動家」であることは強者であることを要求する。「芸術家」である「殺人者」は、その激越な攻撃性と、あくことなく「殺人」を繰り返すその凶悪にもかかわらず、海賊という「行動家」に必要なだけの強さが自分には欠けていると考えているようである。「殺人者」のこうした考えには、当時の三島の切ない思いが反映している。学習院初等科以来の肉体的劣等感高等科に籍を置いてからも三島の心に暗い影を投げかけていた。後に、三島は自分が少年期を送った戦争の時代を振り返り、それが「自分一個の終末感と、時代と社会全部の終末観とが、完全に適合一致した、まれに見る時代であつた」と回想し、そのときの心境を「私はスキーをやつたことがないが、急滑降のふしぎな快感は、おそらくああいふ感情に一等似てゐるのではあるまいか」（三二-278）と語った。そうした感懐を抱きつつ、『花ざかりの森』を出版し、いまだ少数の人々のあいだではあつたが天才ともてはやされていた戦争末期の三島が幸福でなかったとはいえない。しかし、それでも、宿痾のような肉体的劣等感依然として、というより以前にもまして三島を苦しめていた。そのことは、たとえば、ボディビルによって肉体改造を果たし、長年の悲願だったスポーツの世界に参入した後年に語られた次のような感懐からも窺うことができる。

私が人に比べて特徴的であつたと思ふのは、少年時代からの強烈な肉体的劣等感であつて、私は一度も自分の肉体的纖弱を、好ましく思ったこともなければ、誇らしく思つたこともなかつた。それはひとつには戦時の環境が、病弱を甘やかすやうな文学的雰囲気を用意してくれず、弱肉強食の事例を山ほど見せられたせゐもあらう。（『実感的スポーツ論』三三-157）

学習院初等科で肉体的な弱者であることを痛切に思い知らされた経験は、もともと幼児期から感じていた世界からの脱落感を強め、みずからの肉体的な弱さこそが世界から隔てられてあることの元凶であると思ひこむに至るほどの重大な意味をもつものだった。海賊になることを勧められたときにそれを受けいれられずに「とめどもなく涙」を流す「殺人者」の過剰とも思える反応には、少年三島の積年の苦悩がこもっている。加えて、この小説が発表された昭和十九年八月以前、同年五月に徴兵検査を受け、一応は第二乙種として合格したものの、兵士としては事実上ほぼ不適格な人間であることがはっきりした体験も三島にとっては、「海賊」への、つまり「行動家」への適性の欠如をあらためて思い知らされた経験として見逃せない。三島は

この徴兵検査を本籍がある祖父の郷里の兵庫県の農村で受けたのだが、東京ではなく地方の農村地帯にわざわざ赴いて受検したのは、体格のいい農村の青年に混じれば、三島の体躯の貧弱さが際立ち、不合格になるだろうという父の計算からだった²¹⁾。何ごとによらず、表向き父に逆らうことのない三島は唯々諾々と父の命令にしたがい、その結果、屈強な農村青年に混じってみずからの貧弱な裸体と非力を人前にさらしたが、これは男性性や強さにこだわる三島にとってはかなりの屈辱的な体験だったにちがいない。それでも『哲学的日記』を雑誌に発表したあと、昭和二十年二月、兵隊不足の状況から第二乙種の三島にも入営通知が来る。覚悟を決めた三島は遺書を書き、再び、兵庫県の本籍地に赴き、入隊検査を受けるが、たまたま風邪で高熱を発していたのを軍医が肺浸潤と誤診し、即日帰郷となった。帰京した三島は家族の狂喜に包まれるが、梓には肝心の三島本人が喜んでいて記憶がまったくないので、三島の死後、妻倭文重に聞くと、三島はその当時、母には「合格して出征し、特攻隊に入りたかった」²²⁾と語っていたという。どんな人間のどんな言葉も一義的な真実を伝えるものではなく、語られた言葉の背後には多くの捨象された事実や感懐が潜んでいるものだが、三島のこの言葉の背後にも実は戦争に行かないですんだことを喜ぶ気持があっただろう。また、軍医の誤診をいいことに出征を逃れたやましさをあからさまに喜びをあらわすことができず、本当の気持としては出征した者たちと運命をともにしたかったと言うことで自分を免責しようとしたということもあるだろう。しかしそれでも、戦死して殉国の英雄になりたいという気持が戦時期の三島にあったことは、当時の心境を主人公溝口に託して描いた『金閣寺』などの後年の作品から読みとることができる。吃音と身体の虚弱に悩み、世界から脱落し疎外されているという感覚に苦しむ青年溝口は、戦争末期、日本の都市が空襲によって次々に壊滅状態になっていくなかで、金閣が空襲に見舞われ、自分もまた焼亡する金閣と運命をともにすることを熱望するのである。兵役を逃れた三島のなかに、苦しみに満ちた生を公然と、しかも英雄として人々の記憶に残るかたちで終らせる絶好の機会をみすみす、しかも卑怯といえるかたちで逃したことへの後悔があったことはまちがいない。戦争は三島にとっては民族全体が減じる悲劇的な運命のなかで自他の隔たりが融解する、ディオニュソス的な祝祭だった。戦争末期の東京を襲う爆撃機による破壊と殺戮の光景は、勤労働員に駆り出された神奈川県高座郡の海軍高座工廠からはるかにそれを眺める三島にとっては、この上なく美しい死の饗宴だった。

いづれは死ぬと思ひながら、命は惜しく、警報が鳴るたびに、そのまま寝てすず豪胆な友だちもゐるのに、いつも書きかけの原稿を抱へて、じめじめした防空壕の中へ逃げ込んだ。その穴から首をもたげて眺める、遠い大都市の空襲は美しかった。焰はさまざまな色に照り映え、高座郡の夜の平野の彼方、それは贅沢な死と破滅の大宴会の、遠い篝のあかりを望み見るかのやうであつた。(三二-280~281)

このように回想する三島のなかには、おそらく人道的に戦争の悲惨を訴えるありふれた反戦的回顧への悪意があり、思春期の少年のような露悪趣味とサディズムがあるだろう。しかし、三島の言説にしばしばあらわれるこの種のシニシズムや幼稚な審美主義と見えるものを支えているのは、そのこれ見よがしの外観にもかかわらず、何よりも、自身の体験を世の支配的な思潮に媚びることなく、みずからの印象に即して語ろうという文学者としての誇りと倫理性であるだろう。後世はこうした三島の証言によって、反戦的な決まり文句で語られる歴史のなかには存在しない戦争の一面を知ることになるのである。しかも三島によって語られる空襲の美や戦時期の幸福や戦死への憧憬は、必ずしも三島という特異な作家の特異な趣味ではなく、当時の一定数の青年、一定数の日本人によって共有されたものであっただろう。少なからぬ人間が抱きながら、公共の世界で言葉に出して語ることは憚られるひそやかな思いを三島は文学者の職分として語ったのである。「出征し、特攻隊に入りたかった」という三島の思いは宿痾のように残って戦後に持ち越され、三島を奇怪な死へと導くことになるが、おそらくそうした三島個人の運命にも、戦時に死にきれず、生き恥をさらしているという思いを抱える少なからぬ戦中派の代表的な性格があるだろう。死の二年前に刊行された『太陽と鉄』は、戦いのなかで「英雄」的に死ぬことへの三島の渴望を物語る書物である。そこで三島は三十歳以来の肉体的な鍛錬が、そうした死への憧憬から行なわれたものであると語っている。自衛隊に体験入隊した三島はその激しい戦闘訓練に耐えるだけの肉体を得たことに「世界と融け合つた無辺際よろこび」(三三-548)を覚える。それは「あらゆる悲劇的因子を孕み、破滅を内包し、確実に『未来』を欠いた世界」、つまり戦時の世界に「住む資格を完全に取得したといふ喜び」(三三-549)だった。しかし、それは戦後の世界にあってはもちろん、季節外れの、遅れてきた喜びだった。

何といふ皮肉であらう。そもそもそのやうな、明日といふものがない、大破局の熱い牛乳の皮がなみなみと湛へられた茶碗の縁を覆うてゐたあの時代には、私はその牛乳を呑み干す資格を与へられてゐず、その後の永い練磨によつて、私が完全な資格を取得して還つて来たときには、すでに牛乳は誰かに呑み干されたあとであり、冷えた茶碗は底をあらはし、私はすでに四十歳を超えてゐたのだつた。そして困つたことに、私の渴を癒やすことのできるものは、誰かがすでに呑んでしまつたその熱い牛乳だけなのだ。(三三-549)

女性ばかりに取り囲まれ、女の子のような語り口と物腰をもつ子どもだった幼少時代から、三島のなかに男性的な荒々しい行動へのつよい憧憬があつたことは、『仮面の告白』の幼い「私」が汚穢屋や兵隊や、神輿を担ぐ若者たちに熱い思いを寄せたという回想に反映している。しかも三島が考える行動は、その「死と夜と血潮」へ向かう性癖に則つてあくまでも血なまぐさい、サド＝マゾヒスティックな色合いをもつものだった。死の前年から死の年にかけて書かれた

『行動学入門』のなかで三島はいかにも三島らしい行動観を語っている。すなわち、三島は、「武器といふ一定の目的を持った道具を使つて、人間がその武器と同一化して、目的に向かつてまっしぐらに突進することを、行動といふものの定義と考えていい」(三五-608)と語るのである。命のやりとりを伴う激烈な肉体的行動こそが「至純の行動」であり、「簡潔に人生といふものの真価を体現」(三五-610)するものであると三島は述べている。三島のこうしたファナティックな、極度に好戦的な行動観は、幼年期からのサド=マゾヒスティックな資質から生みだされ、さらに戦争を生き長らえてしまったことへの慚愧の念がそれを増幅させていったところに成立したものであるだろう。戦後の三島由紀夫がひたすら行動を讃美し、ついには『天人五衰』で認識者を窃視者にととえるほどに認識を貶めることになったことに、みずからの怯懦によって出征することなく、傍観者として戦時期を生きながらえたことへの自己嫌悪が深く関わっていることはまちがいない。

戦後の、特に肉体改造以後の三島の歴史は三島流の「行動」に向けて入念に、偏執的に形成された歴史だった。そしてその歴史にもやはりニーチェの哲学が深い影響を及ぼしているといえる。ほとんどの人生の時間を病苦にあえいで送ったニーチェが、三島のように肉体の鍛錬に励み、肉体の強者として「行動」に踏み出すことはなかった。ニーチェにとっての戦場はどこまでも哲学の世界であり、ニーチェの生涯は認識の戦士として始まり、認識の戦士として終わった。『楽しい知識』で「私にとって認識とは、英雄的感情さえもがそこで踊ったり跳ねまわったりすることができる危険と勝利との世界なのだ」と誇らかに語り、「人生は認識の一つの手段なのだ」(V₂-233, Die fröhliche Wissenschaft-324)と言い切ったニーチェに三島のような倒錯した認識への嫌悪はない。しかし、このように哲学者であることを誇り、また哲学者以外の何者にもなりえなかったニーチェの言説は、そうでありながら、戦闘的な肉体的行動を称揚する言葉にあふれていた。たとえば『道徳の系譜』のなかで、ニーチェが罵倒したのは同情や禁欲を奨励する「僧侶的価値判断」であり、ニーチェが賞賛したのは強い肉体や自由で快活な気性をよとする「騎士的・貴族的価値判断」だった。

騎士的・貴族的な価値判断がその前提におくものは、強壮な肉体であり、咲き誇る、豊かで湧き立つような健康、加えてそれを維持するために不可欠なもの、すなわち戦争、冒険、狩猟、舞踊、格闘技などであり、さらに強い、自由で明朗な行動を伴うすべてのものである。(VI₂-280, 第一論文7節)

ニーチェには三島のような認識への激しい憎悪はなかったが、行動的で戦闘的な男性性の讃嘆、男性美を至上のものとする審美主義という点において、三島に引けをとることはなかった。戦後の三島がおそらく肉体の改造に着手したころから、つよい意志をもって踏み出した行動への道とその奇矯な結末は、ニーチェの哲学が内包しながら、現実のニーチェが実践しえな

かった戦士的なものの一つの実現だった。もちろん三島がニーチェから遠く隔たる時間と空間のなかで実現したものは、昭和という時代における日本の社会という外的条件、そして三島という個人の私的事情が複雑に絡まって成立したものであり、ニーチェの影響によるというには、あまりにも特殊な偏りをもったものであるだろう。三島の自死をもたらしたもろもろの要因のなかには自分のなかの認識者への憎悪という心理的要素があったことが推測されるが、それこそはニーチェと三島を分かち最も大きな相違である。認識への憎悪はすでに戦前の三島において萌芽としてあり、戦後の、職業作家として傍観者でありつづける歳月のなかで肥大していった。外界が死に向かう青年たちの行動に溢れていた戦争末期にあっては、みずからの行動への適性のなさや怯懦ゆえに男性的な行動の美学をまっとうできなかったことへの慚愧の念は、三島の戦後の思想と行動を大きく規定するものとなった。

『哲学的日記』は次の一節で終わっている。

□月□日

殺人者は理解されぬとき死ぬものだと言へられる。理解されない密林の奥処でも、小鳥はうたひ花々は咲くではないか。使命、すでにそれがひとつの弱点である。意識、それがすでにひとつの弱点なのだ。こよなくたをやかなものとなるために、殺人者は自らこよなくさげすんであるこれらの弱点に、奇妙な祈りをさげざるべき朝をもつであらう。(一六-155)

芸術はしばしば無用のものとして軽視されるが、とりわけ戦時には貶められ、唾棄される。殺人者＝芸術家はしかし、その無用性のなかでおのれの職分をまっとうするほかに生きる術をもたない。時代の局外者として生きる文弱の少年は、理解されない悲しみを抱きつつ、それでも人知れず表現しつづける覚悟をもとうとしている。「このうえなくたをやかなものとなるために」という言葉があらわすように、ここで少年が目指すものは、「たおやかな」美の実現であって、航海者との対話で示された行動と芸術の二元的対立という問題は、行動への適性のなさゆえに芸術を選ぶしかないということで決着がついたようである。作中には攻撃的な破壊衝動が満ち満ちているにもかかわらず、ここで少年三島は、「たをやかなもの」、すなわち、女性的な文弱さにとどまることをみずからの生き方として選びとる決意を示している。哲学者ニーチェの反時代的姿勢を範とする三島が、荒々しい戦時の状況への反時代的な姿勢として選びとったこの結論は、しかし、戦後の平和のなかでは次第に後退し、かつてはそこから逃れた男性的な行動の世界への参入こそが、切実な問題として浮上していくことになる。

注

- * 三島由紀夫からの引用は、特に注がついているもの以外は、すべて新潮社『決定版三島由紀夫全集』（2000年～）に拠っている。引用のあとの（ ）内に全集での巻数を漢数字で、ページをアラビア数字で示している。
 - * ニーチェの著作からの引用は次の全集に拠り、本文中の引用のあとのカッコ内に巻数をローマ数字と小さなアラビア数字、ページをアラビア数字で示した。Nietzsche: Werke, Kritische Gesamtausgabe, hrsg. von Giorgio Clli und Mazzino Montinari, Walter de Gruyter & Co., Berlin 1967ff.
- 1) 平岡梓『俣・三島由紀夫』文芸春秋, 昭和47年, 58頁
 - 2) 三島の幼少期については、詳しくは拙著『マンと三島・ナルシスの愛』（鳥影者 2011年）第二部第一章を参照されたい。
 - 3) 奥野健男『三島由紀夫伝説』新潮社, 1993年, 64頁
 - 4) 平岡梓, 前掲書 263頁
 - 5) ニーチェの生い立ちについては次の書物に依拠している。
西尾幹二『ニーチェ』中央公論社, 1977年
 - 6) 氷上英廣『ニーチェの顔』岩波新書, 1976年, 8頁以下
 - 7) Lou Andreas-Salomé: Nietzsche in seinen Werken, Insel Verlag, Frankfurt am Main 1983, S.37
 - 8) Lou Andreas-Salomé, a.a.O.S.39
 - 9) 氷上英廣, 前掲書 5頁
 - 10) 清水真木『知の教科書 ニーチェ』講談社, 2003年, 133頁以下
 - 11) Lou Andreas-Salomé, a.a.O.
 - 12) Joachim Köhler: Zarathustras Geheimnis, Friedrich Nietzsche und seine Verschlüsselte Botschaft, Reinbeck bei Hamburg 1992, S.226
 - 13) a.a.O.S.227
 - 14) 西尾幹二, 前掲書 237頁以下 1
 - 15) H.F.Peters: Zarathustra's Sister, The Case of Elisabeth and Friedrich Nietzsche, New York: Crown Publishers, Inc. 1977, p.27ff.
 - 16) 平岡梓, 前掲書 105頁
 - 17) 『マンと三島・ナルシスの愛』（前掲書）179頁以下
 - 18) 三島由紀夫『花ざかりの森・憂国―自選短編集―』解説, 新潮文庫, 昭43年
 - 19) ボードレールについて三島は、「私は少年時代にボードレール読んでボードレールに非常にかぶれましたからね」と語っている。（『国家革新の原理―学生とのティーチイン』四〇-254）また、『ワイルドについてはエッセイ『禁色』は廿代の総決算』のなかで谷崎潤一郎、ラディゲとともに少年時代にもっとも夢中になった作家として挙げている。（二七-476）
 - 20) 三島自身の証言によれば、三島が戦時中に読んだ『ツァラトゥストラ』は登張竹風訳の『如是説法ツァラトゥストラ』である。しかし、三島が読んだのがほかならぬ登張訳であることによって特別なニーチェ理解がそこに生じたとは考えられないと判断し、また、ほかのニーチェ作品からの引用との兼ね合いを考えて、本論での『ツァラトゥストラ』からの引用は登張訳を参照した上で、原典から論者が訳したものを呈示している。
 - 21) 佐藤秀明『三島由紀夫 人と文学』勉誠出版, 2006年, 43頁
 - 22) 平岡梓（前掲書）, 88頁

Teenage experience of Nietzsche by Yukio Mishima

Shuzo TAKAYAMA

Abstract

Yukio Mishima enjoyed reading the works of Nietzsche from childhood, and was greatly influenced by him. Both Nietzsche and Mishima spent their childhood surrounded by women. The philosophy of Nietzsche, created as someone growing up surrounded by women who was fighting with his inner femininity, holds marked hatred towards this concept of femininity, including passivity, obedience, and weakness. It suited Mishima, who was starting to remodel himself toward a male psyche with adolescent self-awareness. Mishima admits that his novel 'Extracts of a Murderer's Philosophical Diary in the Middle Ages', written at the age of 19 during wartime, was considerably influenced by Nietzsche. In this novel, which describes the thoughts of a 'murderer' who commits indiscriminate mass-murder in the manner of a diary, the 'murderer' takes back the lost breath of life through committing such 'murder'. 'Murder' is a metaphor for the dangerous art that Mishima set out for, as well as referring to the evil act of murder itself. It reflects his radical determination to take his own life back, as he was suffering from the reality that he had been prohibited from showing aggressiveness from childhood and stifled by healthy living. That determination was generated from an affinity with Nietzsche's aggressive works, who also spent his childhood surrounded by women just like Mishima, suffered from weakness and feelings of being an outsider in the world, and continually expressed a desire to overcome these failings through masculine heroism.

Keywords: Yukio Mishima, Nietzsche, 'Extracts of a Murderer's Philosophical Diary in the Middle Ages', femininity, masculine heroism